

御座候、御断申長候と答、上番衆へ被_二差出、上番衆五人車座に成、明り取方少々明け御改御座候間、やゝ久し御改相濟、元之御手形改渡す、同人讀事兩三度にして受取ました、御扣被_レ成と被_レ申、聞茶屋手引之通元へ戻り御門立出差扣、

少々相立、御關所左右之御門下へ六尺棒を貳人づゝ出、往來を留、御門外より見受候處、上之方御門外より姥入來、年頃四拾歳位、木綿堅縞之布子へ帯_レ黒木綿寫之紋附之布子かいどりに着し、前髪之上に貳寸に四寸位之綿を載、御番所之縁上り、

御呼込拙者女を召連御番所改出る、女者縁へ腰懸け、拙者縁より壹間程離れ、腰かゝめ扣、姥女の髪をほどき、毛先を改、姥番人衆に向おしぎを致宜しと答、

番人衆拙者へ向是にと被_レ呼候間、縁隣へ出る、拙者身分姓名を被_レ尋、

大御番頭大岡紀伊守與力若黨と答、

又御尋百姓の女、何故世話致候哉、御大切之御手形下男等に爲_レ持候而者、恐入候事、私女之身寄に付被_レ頼、守護致し候旨答、手形改より上番衆御談判、評議之上御聞届被_レ成、被_レ通よと被_レ申聞候、奉_レ畏候旨答、猶相願候者、荷持之下男壹人御通被_レ下候様にと申通すと被_レ申聞候、右之通にて、三人一同御關所を通、拙者并咲次郎手形之義者入不_レ申候、これで手形改めの様子がよく分る、手形改めは随分念の入つたものであると云ふべきである。

めでた〜の若殿様は

知行まします年ごとに

山の荷持ちは花なら蕾

立場々々でさけ〜といエー

(雲助歌)

小田原と箱根

② 地文上より見たる箱根山

位置

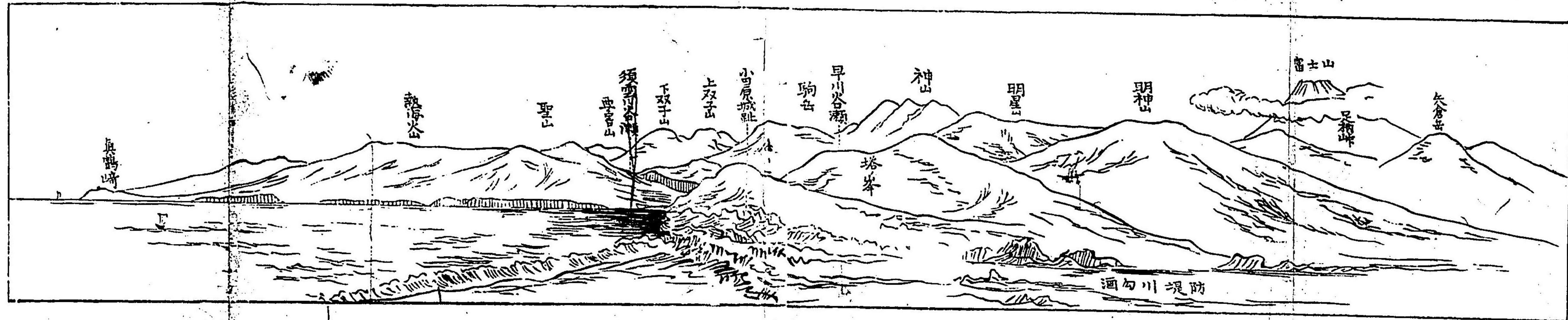
本州の中央部を横断して、こゝに富士山を始め、數多の火山が略南北に列坐してゐる。而してなほこれより南方の海中には火山島が點々頭角を現はして遠く南方のマリアナ諸島に連つてゐる。是等の一帯の火山及び火山島は富士火山帯の名を以て總稱せらるゝ所のもので、箱根山は此の富士火山帯の一部を占めてゐる一大火山である。

箱根山は相模駿河の兩深海が伊豆半島の頸部を壓迫する所の地頸部に踞し、關東地方の陸境を圍繞する天然の障壁の極南に當り、交通の幹線たる東海道の中腹を扼してゐる。古來軍略上大に重きを置かれた所、天下の嶮を以て呼ばるゝ所である。

箱根山は構造上複式火山に屬してゐる。秀麗を極むる點に於ては富士山

構造

(平林氏の作圖に依る)



○
○
外輪山

に及ばぬこと固よりであるが、複式火山として規模の壯大なる點に於ては九州の阿蘇山と共に世界有数のものである。實に火山全體を占領する地域約一千二百五十六平方呎、舊火口の面積約二百四十五平方呎、其所に數千の生靈が起臥してゐるのである。凡そ火山が其の火口内に更に新火山を生ずる如き場合には、舊火口の外壁を外輪山と呼び、中央の新火山を火口丘といひ、又外輪山と火口丘との間に生ずる谷合を火口原と稱するのである。而して又火口原に瀦溜する湖水を火口原湖といひ、火口原の水が外輪山を破つて外に出る水路を火口瀬と呼ぶのである。箱根火山は是等の條件を悉く具備してゐるから火山構造の研究上至極適當の資料に供するのである。予は今箱根火山の有する此等の條件に簡單なる説明を與へて、箱根山の地文上に於ける價值の一端を紹介しやうと思ふ。

地文上より見たる箱根山

約十軒、東西約六軒半、面積約二百四十五平方軒に達する大火山の外壁をなしてゐる。多年風雨の消磨作用を受けて、其の原形を毀損してゐることの少なくないことは勿論であるが大體に於て比較的完全な火山壁をなし、内面に三十五度内外の急斜面を現はし、外側に緩傾斜をなしてゐる。殊に西壁の如きは最も完全な外壁として知られてゐる。唯東方の早川火山瀨に、又南東の須雲川火山瀨に著しく破られてゐるのを見るのみである。今外壁中、其の高低の中有名のもの及び海面上の高さを、北壁に登えて外輪山の最高點となつてゐる金時山から始め、西から南と順に擧ぐれば左の通りである。

金	時、山	一、二二三米	乙	女	峠	一、〇九九米	
九	岳	一、一五三	長	尾	峠	九四八	
湖	尻	峠	八五〇	三	國	山	一、〇〇二

火山

神山

冠岳

山	伏	峠	一、〇三四	箱	根	街	道	八五〇		
鞍	掛	山	一、〇〇四	屋	敷	山	一、〇一一			
要	害	山	九四八	須	雲	川	火	口	瀨	七〇〇
鷹	巢	山	八三七	淺	間	山	一、一六五			

舊火山内には四箇の火山口が南東壁より北西の方面に列坐して、甚だ複雑な地形を現はしてゐる。其の最北西に最も雄大な而かも複雑な外形をなしてゐるのは神山で、海拔一、四三八米を以て箱根火山の最高點となつてゐる。全山樹木盤亂、攀登踏査の困難を以て知らるゝ所、且其の火山口も屢次の爆裂のために、これを明に踪跡することの困難なる所である。されど神山の北の一峰は西北及び東の三方から削り取りたるが如く壁立し、峰頭恰も烏帽子の如く、其の名も冠岳と呼ばれてゐる。此の冠岳を中心として神山より左右に一連の高峰が箕状をなしてゐる。これが神山の火山

地文上より見たる箱根山

大涌谷

口で冠岳は其の昔熔岩などを噴出した火道たるものである。此の冠岳の北に臨める崖下は即ち大涌谷で現に硫汽を盛に噴出してゐる。此の大涌谷は神山の爆裂のために出来た新火口であり、又此の大涌谷の北壁をなして立てる臺岳、其の北東の小塚山は共に大涌谷爆裂のために分離した神山裾野の一部である。かく神山は山體大に破壊して複雑なる形體をなしてゐるが、其の北及び東の方へ美しい裾野を曳いて火山形體の一特相を充分に發揮し、吾人をして坐に大爆裂以前の美形を想像せしむるのである。

小田原と箱根

駒岳

神山の複雑なるに反して、其の南に端坐し最も人目を惹き易すきは駒岳である、駒岳は神山の南腹を破つて瘤起し、火口丘中最新のもので、高さ一、三五五米、神山より少しばかり低い。頂上に淺き楕圓形の火口があつて其の北壁に更に第二の火口丘が聳えてこれ亦小さな火口を有し

双子山

て、こゝに第二の複式火山を作つてゐる。此の火山の熔岩は神山の方面を避けて、重に他の方面へ流下したものであるから、其の流下した方面の裾野は完全であるが、神山に於て見たる裾野に比すれば非常な急斜で、全體の山容が鐘狀を爲してゐる。即ち駒岳の火口より續々推し流された熔岩は早く凝固して遠くまで流下しなかつたのである。かく山體の全部が熔岩より出来て居るものを乳房山或は塊狀火山と云ふのである。随つて其の山貌も美しい鐘狀をなすものである。駒岳の東麓には硫黄山及び湯の花澤の爆裂火口があるが、これは其の區域が狭いから山容を傷つくるまでに至らなかつた。

駒岳の南東に隣り外輪山の内壁を破つて噴起した二火山は、下双子、上双子の二火山である。共に同時に噴火し、相癒合して雙兒の形をなしたもので、其の名も双子山と呼ばれてゐる。駒岳に近きは上双子山で高サ

地文上より見たる箱根山

火口原
蘆ノ湖
宮城野
池尻
精進ヶ池
阿字ヶ池

一、〇九〇米に達してゐる。下双子山はこれより少しばかり低くて一、〇六五米に達してゐる。各々山上に火口を有してゐるが、下双子の方は火口壁が大に破壊して三峰頭に分れてゐる。共に急斜の圓錐形をなしこれ亦駒岳の如く乳房山に屬するものである。

以上述ぶる外輪山と中央火口丘との間に一大火口原が開いてゐる。此の火口原は火口丘の排列のために略々馬蹄形をなしてゐる。もとは全部一大火口原湖をなしてゐた所であるが、其が漸次減水した結果、今は僅に蘆湖が形見となり、駒岳及び神山の裾を洗つてゐるのみである。而して蘆湖から北部にかけては仙石原、此の南東は宮城野、更に此の南は池尻の沃野となつてゐる。又以上の火口丘間の低地に潑水して池塘をしてゐるものは、上双子と駒岳の接合地にある精進ヶ池、下双子の西麓にある齊ノ池、上双子の北麓に近き阿字ヶ池等で、何れも火口ではないのである。

小田原と箱根



塔ヶ島
火口湖
早川

蘆湖は南北に長くして瓢の形をなし、長さ一里十六町、幅十七町四十間、周圍五里四町面積約七百五十三町歩、湖面の海拔、七二〇米である。最深所は南東部に在つて約百五十米に達すといふことである。湖南に小半島が突出してゐる、これ即ち塔ヶ島で、離宮の所在地となつてゐる。昔の關所は其の南西の湖邊に在つたものである。塔ヶ島より北東箱根権現社に至る間は一帶の淺瀬をなしゐる、これは駒岳の末流が水波のために洗ひ去られた所であらう。此の邊すべて山水の景頗る明媚、箱根第一の勝地と稱せられてゐる。

蘆ノ湖の水は一部湖尻峙に開掘せる人工の洞門から西に出るが、おもに北端湖尻より出で、早川となり、仙石原を過ぎ、碓氷峙と小塚山との間を峽流となつて宮城野に下り、更に阿字ヶ池より來たる蛇骨川を併せて大に水量を増加し、是より外輪山の東壁明星、淺間兩山間に約四百米

地文上より見たる箱根山

に達する絶壁を作つて外に出で、湯本にて須雲川を受け、全長六里六丁で以て遂に相摸灣に朝するのである。海拔七百二十米の蘆湖の高所より下つて海拔十二米の湯本の低所に至るまで水程約四里半これ水流の如何に急激に、消磨力の如何に旺盛なるかを想像する事が出来やう。須雲川は其の水源蘆ノ湖南に在つて、もと早川と共に湖水の落口で、要害山の南に大澤の深谷を穿ちて外輪山を破り、畑宿に至りて蘆ノ湯の餘水にて、數十米の瀧をなして落ち來れる瀧坂の一水を入れ益々浸蝕作用を逞うして東下し早川に會するのである。長サ約三里二十四丁、其の溪谷の深きこと早川に劣らず、屢陰濕の幽谷をなして前世紀動物の形見たる山椒魚の好棲地を供してゐる程である。然るに其の水量が早川の半に過ぎないは須雲川の成生が早川成生以前に在つた爲なのである。かく此の二流は急流であつて水力電氣の落差を造るに便利である爲めに、今日二流

須雲川

共にその發作に利用せられてゐる。

火山餘勢の今なほ最も熾んなるは大涌谷で、其の名も一に大地獄と呼ばれてゐる。實に箱根火山最後の活動を呈した所である。到る所の裂罅より、水蒸氣のほかには亞硫酸瓦斯を噴出し、轉た凄愴の感を起さしむるのである。早雲地獄は神山東腹の爆裂火口で、大涌谷の如くに盛んではなすがこれ亦亞硫酸瓦斯を含んでゐる。更に駒岳の東麓には湯の花澤及び硫黄山の硫氣孔がある。此の二つは前者の亞硫酸瓦斯を吐くと少し異つて、水蒸氣のほかには硫化水素を噴いてゐて、附近を往來するものに其の悪臭を浴びせかけてゐる。小涌谷も亦神山の東麓の小爆裂口で今は僅に水蒸氣のみを噴いてゐる。箱根山は夙に七湯の名を以て知れてゐる所、今では七湯の外にも猶多くの温泉が湧出してゐる。而して此等の温泉は爆裂火口又は其の附近にあ

噴汽孔

大涌谷

早雲地獄

湯の花澤
硫黄山

小涌谷

温泉

小田原と箱根

るもの、外大抵早川の溪谷に存して、須雲川の川筋には曾て温泉の湧出した形跡は残つてゐるが現に湧出する所は無いのである。早川筋には湯本を入口とし、これより上流に塔ノ澤、宮ノ下、堂ヶ島、底倉、木賀の六湯がある。此等の六湯に駒岳の東麓なる蘆ノ湯を加へて古來七湯と呼んでゐるのである。其のほかに泉源を早雲地獄に仰げる強羅(酸性)泉源を大涌谷に仰げる上及び下仙石(酸性)大涌谷の西方なる姥子などがあるから今日では箱根山中に十餘湯を數へ得るのである。以上の諸温泉中、主なるもの、泉質温度及び成分を示せば左の通り。(内務省衛生局編纂大日本續泉誌(明治十九年)による)

○湯本温泉

泉質 單純泉 温度 一〇〇度
 ○塔ノ澤温泉(福住ノ湯、元湯、關口ノ湯、藤屋ノ湯、月ノ田村ノ湯、一ノ湯、栗湯、早野ノ湯、玉ノ湯)

泉質 鹽類泉 温度 一〇五度—一二三度

成分(福住湯)

硫酸那篤偪母	〇.一八五六	格魯兒那篤偪母	〇.三二一〇
格魯兒加偪母	〇.〇〇八三	格魯兒麻偪溼更母	痕跡
炭酸亞酸化鐵	痕跡	有機物	痕跡
格魯兒加爾更母	〇.〇〇二六	硅酸	〇.〇〇五四七
炭酸麻偪溼更母	痕跡		
固形分合計	〇.五七二二五		

○宮ノ下温泉(三日月の湯、熊野ノ湯、吉田ノ湯、瀧ノ湯)

泉質 鹽類泉 温度 一二四度—一四〇度

成分(三日月ノ湯)

硫酸那篤偪母	〇.〇六五六	格魯兒那篤偪母	一.五八八八
格魯兒加偪母	〇.〇〇五二	格魯兒麻偪溼更母	痕跡
有機物	痕跡	炭酸加爾更母	〇.一八一八
炭酸麻偪溼更母	〇.〇六二三	磷酸	痕跡

地文上より見たる箱根山

小田原と箱根

礫 土

痕跡

硫酸加爾叟母

〇・〇二五二

硫化水素 〇・〇〇一七

固形分合計 二・〇五六八瓦

○堂ヶ島温泉(夢想湯、神仙湯)

泉質 單純泉

溫度

一二八度—一三二度

○底倉温泉(神靈湯、萬壽湯、溫酒湯、靈仙湯、總湯)

泉質 鹽類泉

溫度

一四五度—一六八度

成分(神靈湯)

硫酸那篤留母 〇・一五七〇

格魯兒那篤留母 一・一五二八

炭酸加爾叟母 〇・〇五六二

炭酸麻個溼叟母 〇・〇六五一

硫酸加爾叟母 〇・〇二九四

有機物 〇・〇六八五

格魯兒加留母 〇・一七八一

硅酸 〇・二二三〇

固形分合計 一・八二九二瓦

○木賀温泉(上ノ湯、菅浦ノ湯、岩ノ湯、谷ノ湯、大瀧ノ湯)

泉質 鹽類泉

溫度

一〇〇度—一一三度

成分(上ノ湯)

格魯兒麻個溼叟母 〇・六三〇八

格魯兒加留母 〇・〇二二九

格魯兒麻個溼叟母 〇・〇九五〇

硫酸加爾叟母 〇・一七三一

炭酸加爾叟母 〇・一七三〇

炭酸麻個溼叟母 〇・〇一七四

硅酸 〇・〇一九〇

炭酸酸化納俺 痕跡

有機物 痕跡

固形分合計 一・二二二二瓦

○蘆ノ湯温泉(仙液湯、達磨湯)

泉質 硫黃泉

溫度

九八度—一〇七度

成分(仙液湯)

強く硫化水素臭を發し、其の硫化水素の含有量は〇・〇二二六瓦にして、礦物の量甚た少し。

○姥子温泉

泉質 鹽類泉

溫度

一一三度

地文上より見たる箱根山

外輪山の裾野

箱根火山の熔岩は主として、南と北とに流出したものである。然るに北は足柄山地の爲めに阻止せられ、南は熱海火山と一所になり、又南東の一方は相摸灣に没して此等の方面には緩慢なる裾野の特相を充分に發揮することが出来なかつた。東と西とは熔岩の流出南北の如くに甚しくなかつたとはいへ、これを阻止するものが無かつた爲めに、稍完全の裾野を曳いてゐる。殊に北西の裾野は富士の裾野に接近して、こゝに優美の

小田原と箱根

成分	微量	化合硫酸	多量
遊離炭酸	微量	加爾基	多量
格魯兒	多量	礬土	少量
麻痺涅失亞	少量	那篤倫	微量
加里	痕跡		
鐵			
固形分合計	〇、六四六五		

足柄路と足柄峠

裾合谷を作つてゐる。而して此の裾合谷は黄瀬川を養うてゐる。又箱根火山と足柄山地との間を流るゝは酒匂川、東の裾野を灌ぐは酒匂川の支流狩野川である。更に又南西の裾野を限るは三島川である。足柄路は古き時代に既に交通路となつた所である。是は箱根火山の大障壁を避けて富士箱根の裾合谷より箱根熔岩の北に停滞して作つた極めて緩傾斜の所、酒匂川の沼等を迂回し、天然の障礙の最も少ない所をたどつたものである。今現に鐵道東海道線が略々これに沿うて設けられてゐる。箱根峠は箱根山の西の裾野から起り、外輪山を越えて一旦舊火口内に入り、更に外輪山を越えて須雲川火口瀬に沿うて下るのである。それで足柄路に比して大に捷路である代りに甚だ嶮阻を極めてゐる。しかも此の箱根峠は徳川氏の政略上選んで以て必由街道とした所、其の當時には人馬陸續として大に殷賑を呈した所である。然るに今日これを通過せ

地文上より見たる箱根山

0

小田原と箱根

んか、僅に箱根街道特色の敷石、路傍の古松などが昔ながらの有様を語るのみで、甚だ寂寞を極めてゐる、更に足を轉じて早川筋に沿うて進ま
んか、往來頗る繁く、大厦高樓櫓を連れ、大に活氣を呈してゐる。而して彼の衰へたのは、もと單に人力によつたからで、此の興つたのは天然を利用したからであるが、今なほ盛衰所を代へながらも、こゝに好箇の對照を描いて、天然と人力との調和は最後の勝利者であることを示してゐる。又若し閑を得て此の山河を跋涉し、地文人文の諸現象を探究し了り、さて温泉場裡に一夜の休養を試みんか、山靈徐に來つて古今萬般の變遷を具に語るであらう。

箱根路を我越れば伊豆の海や沖の小島に涙のよる見ゆ

續後撰、鎌倉右大臣

箱根巡遊の順序

箱根の名勝舊蹟

箱根に入るには小田原からすると、三島乃至小山、御殿場からする山道など種々の順路はあれど、小田原は其の表門である、其の他の道は裏口である、駿河から見た箱根は一連の峯つゞきで、相摸方面から見た時は遠望でも一見して箱根の構造が概観される、表から入るは正則で而して又便利である、小田原から出發して箱根山内を一日に一巡するには如何なる方法が最良の順路であるかといふ間は屢々聞く處である、一日一巡の順路と二日一巡の順序とは視察の精粗の差と苦勞の差とで、巡路の次第は大した差がない、第一温泉場を見て湖畔の史蹟を探らんには、新道を湯本から塔の澤、宮ノ下、蘆ノ湯を経て箱根町に、それから舊道を歸るのである、湯本から箱根まで新道は車を通ずるが行程四里半、舊道は

箱根の名勝舊蹟

徒歩又は馬で行程二里廿五丁である。

第二は學術探究の捷路である、温泉場以外に大湧谷、火口原、湖水の半周をするので、宮ノ下までは第一路と同じ新道、底倉から木賀、宮城野、強羅を経て大湧谷まで湯本から三里半、それから姥子、湖尻から舟に乗るか湖畔を通るか二里十丁で箱根に達する、舊道を歸ると一周行程九里近くなる。

第三には横断の法であつて、宮城野から早川の左岸に渡つて、仙石原を経て乙女峠を越えて御殿場又は小山へ出る、峠まで湯本から四里、或は舊道を三島へ通れば横断道には最捷路でもが約八里弱、昔を偲ぶにはよいが箱根の研究又は一巡の爲めには平凡であるから寧ろ乙女峠を越えるが面白い。

第四には登山の方である、中央丘の諸山は固より外輪山にも登れるが、

中央の神山、駒岳、二子山の何れへか登れば頗る興味もある又植物の採集も出来る、殊に箱根の構造の大體を知るには登山が最も利益である、今第二の方法を経として便宜地の順序を緯として概説を試みやう。

小田原の西端居神社前から半丁で道路が回轉する處は、箱根口の見付で今に石壘の跡が見える、此處から板橋で村名は大窪村、板橋の西端の地藏堂は永祿十二年湯本より移したもので、地藏尊の木像一丈弘法大師の作といふが、堂の形も異彩があつて木像も却々大きい、正七月の廿三四日には參拜者が頗る多い、堂の廣庭に維新の際の小田原事件の戦死者忠魂碑が建て、ある、村を外れた處は早川の岸に出るので、道路の下を流れる溝渠は小田原の用水の樋口で往時は小田原大部は此れによつて生命を繼いで居たのである、南東早川口に開いた眺、西方崖下に通じた海道

の河岸に數株の老松、急流清く注いで海に連なる處に早川橋が見えて、

小田原から湯本
板橋の地
蔵堂

小田原と箱根

公園の如く、曉天旭の昇る頃、西側の丘陵と河と海との配景は、小田原附近此處に及ぶ處がない、崖端に十數の石階を登ると小寺院で象鼻山妙福寺といふ、日蓮上人鎌倉から身延に向ふ途次此の崖上に坐して房總の故郷を遠望し誦經したと傳へて居る、寺の登口の近傍に三四百年とも思はれる松の大木がある、此邊に立つた眺望は去る能はざるものである、此の崖上の頂には土手の形が残つて居る、細川忠興が占領した故地であるまいかといふ。

電車と海道とが分岐する邊から風祭である、此の分岐點の茶屋の前から右方を見上げると一本の傘松がある、街道は松の下を通つて村に入る、鐵製の電柱は箱根水力のもので久野の方面へ越えて居る、次の村が入生田で此處に稻葉氏の菩提寺址がある、正則の先考妣の爲めに建立した長興山紹太寺である。寺域も舊は十數町歩もあつて黄檗宗の名僧鐵牛和尚

入生田長興山

山崎維新の戦

を聘して建てたのであるが、今は寺門の傾きかけたのと三百六十の長石階が昔を語るのみで、境内は全然荒れはて、微笑拈花空に歸し、松方某の別莊地と定められ、杉樹立の中に庵室一宇在家の老姥が住める位に没落して、稻葉氏の塔婆數基苔蒸して手向ける主もなく、秋に紅葉の血潮が散るのを尋ぬる人のあるばかりである、入生田には一里塚のあつた地今は家並の中に消えて居る、村の端から數丁で山崎の切通に來る、山崎は維新の戦のあつた地である、小田原藩の維新の際の立場は困難であつたから自然二派に分れた、始めは官軍に通ずる事に定まつて居たものを、殉幕士の誘説によつて浪士をかきまうやら官軍に抗する準備やらやつて居たのを、中垣、上田などの名臣が之を聞て再び官軍に降ることゝなつたから、俄かに浪士が逃れ之に驚したのも湯本箱根を占領して官軍に抗することゝなつて、勢ひ藩士は之と戦ふ事となつた、山崎は其の最も

箱根の名勝舊蹟

三枚橋
新道の
分岐点

湯本

福住正兄
翁

小田原と箱根

激しく戦つた處である、無論浪士の敗亡となつて伊庭八郎などは伊豆の方面へ走つたのである、切り通しを過れば三枚橋に來る、東海道は橋を渡つて行く、橋の彼岸の柳の陰には昔ながらの茶屋がある、新道はやはり左岸を西進して、電鐵は右岸を通じ新道と湯本に會する、此處は湯本村の温泉所在地である。

湯本は箱根七湯中最初の湧出といふので成程湯本、近傍諸字を合せて人口二千、停車場の西方背後には早川流れて南方に旋回して居るが、其の方向變換する處に西南方から須雲川が合流する、早川の彼方即ち西側に綠なす森は湯坂山である、山の麓は温泉旅館、無味無臭の清澄なるもので最近山麓から湧出口を見出したので水量も夥しくなつた、旅館福住氏の現主の先考は有名なる正兄翁と稱して、二宮翁の高足齊國捷徑、二宮夜話の著者として筆徳の聞え高き人であつた、又同家には湯本に採掘し

湯坂山

早雲寺

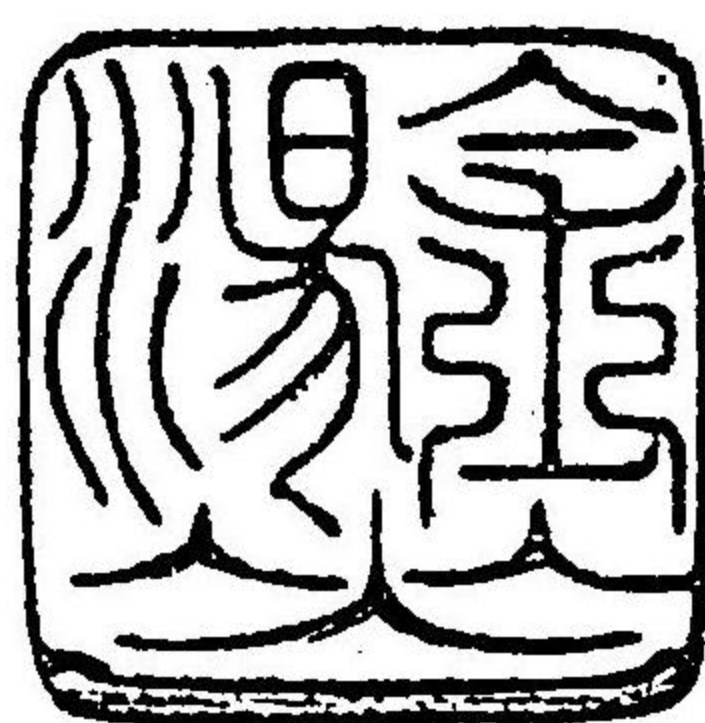
た凝灰岩中にあつた鮫の齒がある、又正兄が白地藏から思ひついて、白石が建築用材になる事を發見して、石の中から天狗爪を發見して今に持傳へてをる。是等は箱根山の地質時代を確定する一の材料である、背後の山は湯坂山、十六夜日記のゆさか山頂上へ通する道は、新道の湯本の家はづれから登る様になつて居る、湯本村は新道の塔の澤から舊道の湯本茶屋まで含まれて居る、三枚橋から舊道を行けば臺の茶屋である、温泉場から須雲川を渡つて急峻な道を二丁登つても行ける、此處に早雲寺の門前に來る、金湯山と題した額面は韓人雪峰の書で、門も瓦も特殊の風で何れも雅趣がある、本堂庫裏は連つて二棟殆んど頽廢に近いから可惜古跡をとの感慨が無量、開山は京都紫野大徳寺の正宗大禪師を招待して、早雲在世の發願によつて二世氏綱之を建立した、當時の境内頗る廣大で、東西廿八町南北廿町、寺門は三枚橋の邊にあつたので門前の部

箱根の名勝舊蹟

小田原と箱根

落は皆な寺百姓であつたらう、氏綱は後奈良天皇の時献金の事などで給旨が下つた、今もかゝる寶物や古文書が多少残つて居る、天正十八年豊公本陣を此處に置いた、次で石垣山に移つた、先に武田氏の小田原攻に風祭から湯本まで兵火に罹つたが本寺も亦災を受けた、天正落城の砌に

早雲寺の判

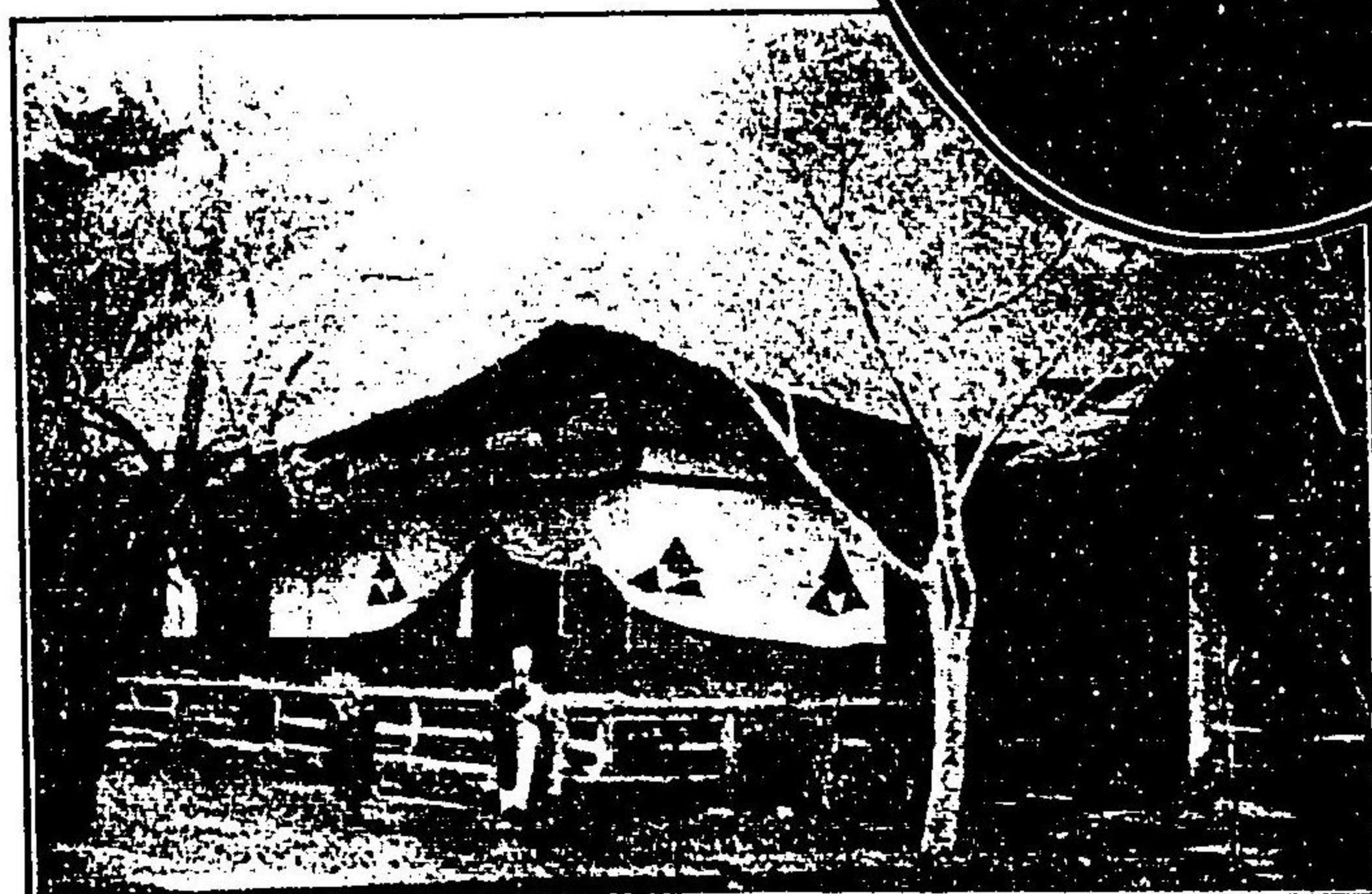


は住職が北條氏に殉じた爲めに再び回祿に罹り全く衰ふるに至つた、家光將軍之が再建を行つたが到底昔の如くにはならない、寺寶の早雲の像は土佐光起の筆で最も善く出来て居るといふ評で、氏綱以下四幅の肖像を對比す

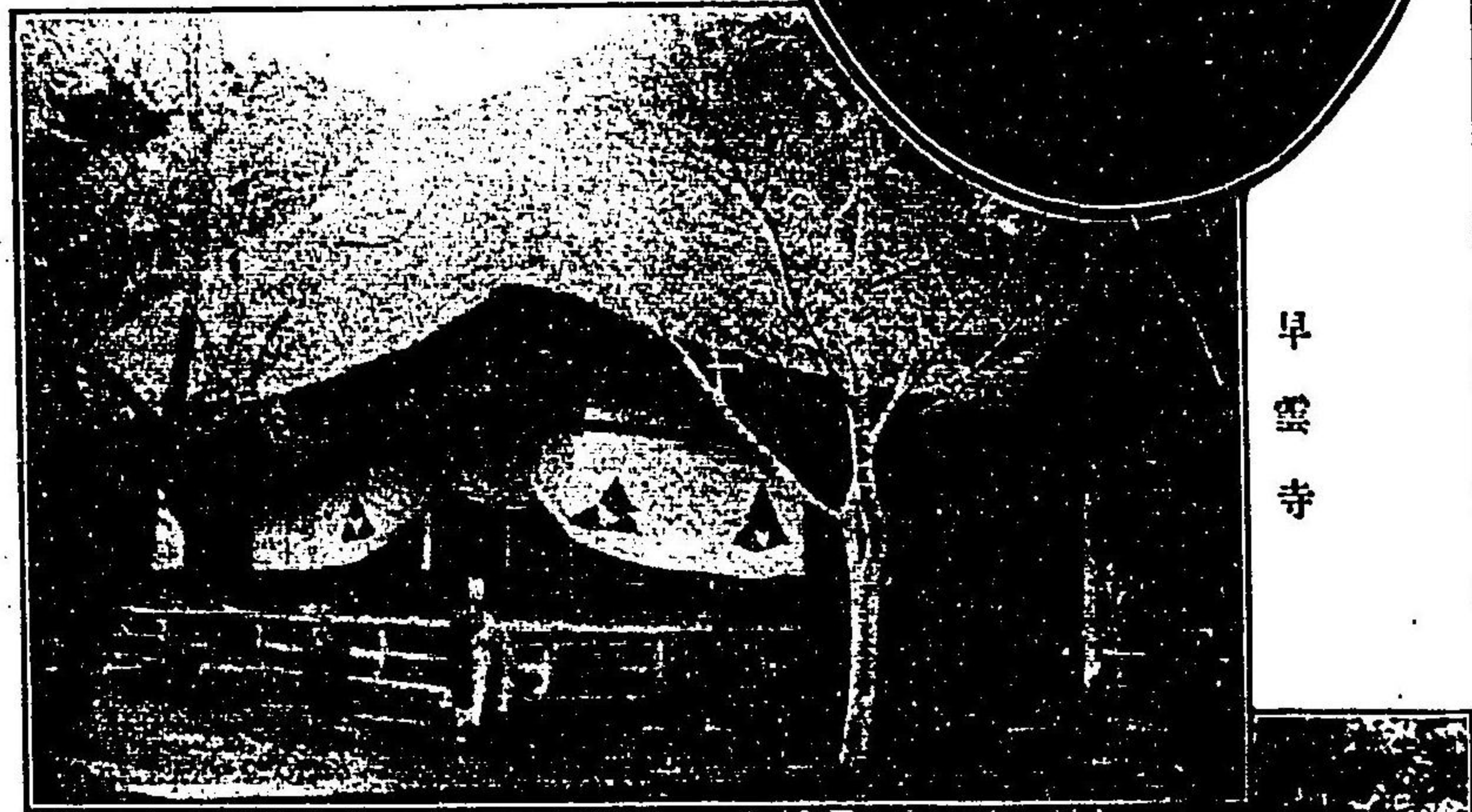
ると、早雲の勇偉から氏直の貴公子然たる軟化の度が思ひ浮ぶのである、本堂の襖は狩野元信の龍虎で頗る珍である、然るに維持費とする爲め賣却するとかいふ噂もある、本堂西北の墓地最上段に五代の墓がある、寛文



早雲寺



北條氏五代の墓



早雲寺



北條氏五代の墓

早雲寺の列



落は皆な寺百姓であつたらう、氏綱は後奈良天皇の時献金の事などで論旨が下つた、今もかゝる寶物や古文書が多少残つて居る、天正十八年豊公本陣を此處に置いた、次で石垣山に移つた、先に武田氏の小田原攻に風祭から湯本まで兵火に罹つたが本寺も亦災を受けた、天正落城の砌には住職が北條氏に殉じた爲めに再び回祿に罹り全く衰ふるに至つた、家光將軍之が再建を行つたが到底昔の如くにはならない、寺寶の早雲の像は土佐光起の筆で最も善く出来て居るといふ評で、氏綱以下四幅の肖像を對比すると、早雲の勇偉から氏直の貴公子然たる軟化の度が思ひ浮ぶのである、本堂の襖は狩野元信の龍虎で頗る珍である、然るに維持費とする爲め賣却するとかいふ噂もある、本堂西北の墓地最上段に五代の墓がある、寛文



北條早雲



早雲寺



北條氏五代の墓

早雲寺の列



落は皆な寺百姓であつたらう、氏綱は後奈良天皇の時献金の事など給旨が下つた、今もかゝる寶物や古文書が多少残つて居る、天正十八年豊公本陣を此處に置いた、次で石垣山に移つた、先に武田氏の小田原攻に風祭から湯本まで兵火に罹つたが本寺も亦災を受けた、天正落城の砌には住職が北條氏に殉じた爲めに再び回祿に罹り全く衰ふるに至つた、家光將軍之が再建を行つたが到底昔の如くにはならない、寺寶の早雲の像は土佐光起の筆で最も善く出来て居るといふ評で、氏綱以下四幅の肖像を對比すると、早雲の勇偉から氏直の貴公子然たる軟化の度が思ひ浮ぶのである、本堂の襖は狩野元信の龍虎で頗る珍である、然るに維持費とする爲め賣却するとかいふ噂もある、本堂西北の墓地最上段に五代の墓がある、寛文

宗祇の墓

湯本發電所

十二年八月北條氏治再建との銘刻で、元より五代悉く埋められたかは疑問であるが氏綱氏康位は事實であらう。一段低き東方に宗祇の墓がある。文龜二年七月此の地に死んだは事實であるが、遺骸は駿河桃園定輪寺に葬つた筈である、醫師眞曲瀬(今大路)道三は寛永三年九月十三日將軍に謁した歸路に此處で卒したのである。本堂の裏の庭は古風で頗る雅である、早雲寺から舊道を西に行けば湯本茶屋、此處を離れて道が須雲川の岸に近よる邊まで行けば數丁で轟々遠雷の響きがする、眼を湯坂山に移すと半腹から鐵管が二條、小田原電氣鐵道會社の發電所である、鐵管の長サ、落差六百六十尺内徑廿四吋、水壓百九十封でベルトン式水車四個(千二百五十馬力)を運轉して七百五十キロワットを發電する、樋口を須雲川上流畑宿の下溪に取つて、湯坂山の半腹を内徑卅吋の管で千五百六十四間を引いてある、廿五年に電燈を始め卅三年までに七十萬六千圓を

箱根の名勝舊蹟

玉麿の瀧

小田原と箱根

費して成功した、電車の外箱根平塚間の電燈と精米等に電力を供給して居るが、附近の物質的文明に貢献するは此處から出る光である。

發電所から須雲川に沿うて左岸を一丁下ると、子安氏の彌榮館通稱玉麿の瀧である、緑陰深き庭内は自由に開放されて、山麓に迸り落つる水は數十百條の玉簾となつて庭池へ瀑流する、山腹は集塊岩であるから幾多の罅隙がある、高サ廿二丈巾二丈餘實は名の實である。

湯坂の頂は最古道である、十六夜日記の湯坂は今も蘆ノ湯への近道に知らるゝのみであるが、元來箱根道は屢々變移したので、板橋の早川沿道も往昔は山腹を通つたらしく、交通未開時代の例によつて谷底よりは峯尾を採擇したのであるから、湯坂山は戰國時代以前には街道であつたであらう、若しも登口が急峻でなく、温泉が谷間に湧出しなかつたならば、今も此線が往還であらうかと思はれる、何となれば一たび數丁の急

湯坂山

新道開通

坡を登ると廣濶な見晴しで、山と海の景は双眸の中に入るのであるから、好んで陰氣な舊道を通る必要がない、頂きは城山で大森氏の持城であつたといふが今も濠の址はある、山づたひに蘆ノ湯に出る距離は、新道を行くのと三と二の比例である、唯人通り稀な爲めに夏草繁く道は占領せられて秋冬の様に便利でない。

湯本から早川本流に沿うて築かれた新道は俾も荷車も便利に通ずるが、明治初年までは駕籠に乗るか、馬か、徒歩かの外はない山道であつた、全く聖代繁盛の賜で湯本塔ノ澤間は廿一年九月道路の許可が成つて、塔ノ澤宮ノ下間は廿二年七月に許可で現時の新道は成就したのである、宮ノ下箱根間は更に最近數年前の開通である、今は東海道の本道より遙に整備した道路となつた、塔ノ澤まで五丁徒歩でも十分足らず、早川の溪流は漸く景を表して來て狭長な谷間を照す夏の眞盛も若葉の香涼しく、交通

塔ノ澤

箱根の名勝寄附

小田原と箱根

不便な昔でさへ湯本に近いから名士雅客の訪ふ處となつた、幾多朝野の
騷人が雅懷を残した中、朱舜水の稱譽によつて水戸義公が驪勝山と名け
られたといふが、無味異臭の稀薄な鹽類泉は清澄で水量豊かて心地よく、
昔も今も變りない客を引く力、環翠樓や洗心樓の繁昌は却つて昔の湯屋
より勝利であらう。

序でに言つて置きたいのは箱根諸泉の性分である、十二湯の悉くを示す
は煩しい限りであるが重なるものゝ對照は必要であらう。

酸性泉	小湧谷	1.2300 0.0200 0.2150 0.1100 0.1200 0.1500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹼性泉	蘆ノ湯	0.2300 0.1200 0.1100 0.1100 0.1100 0.1100 0.1100	—	—	—	—	—	—	—
單純泉	湯本	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
單純泉	塔ノ澤	0.3000 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
單純泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	湯本	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—
鹽類泉	塔ノ澤	0.3500 0.1000	—	—	—	—	—	—	—

十二湯を泉質によつて分類すると次の様になる

- 鹽類泉 (塔ノ澤、宮ノ下、底倉、木賀、姥子、)
- 硫黄泉 (蘆ノ湯、湯ノ花澤、)
- 單純泉 (湯本、堂ヶ島、)
- 酸性泉 (小湧谷、強羅、仙石、)

判の寺陀同阿



箱根の名勝書跋

同じ鹽類泉にでも各泉特性があるが
大同によつて見たのである。
塔ノ澤の北を蔽ふ山は塔ヶ峯で、外
輪山明星岳の連嶺である、中腹は鬱
鬱たる森林で頂上は箱根全山の特性
で禿山である、早川に架けた千歲橋
を(塔ノ澤の入口で)渡ると環翠樓前

小田原と箱根

に登山口があつて、それから約十五丁で阿育王山阿彌陀寺に入る、慶長年中久野總世寺と同じく安叟の開山。

塔ノ澤の端まで上ると對岸臺ヶ岳の麓に百雷の轟で發電所が新築せられた、對岸の中腹から落差七百廿尺内徑卅吋の水管で、箱根水力電氣會社の發電所は即ち是れ、水源は宮城野の大東から引いて一萬五百七十九尺明神明星の山腹を横に切つて、一秒時八十六立方尺の水壓力は、獨逸ホワイト社のペルトン式水車三臺(外一臺は備)七千五百馬力を運して二千キロボルトを發電する、湯本よりは餘程大きい、三十九年創立で横濱市の電燈に使用するのである、新道は早川の右岸に沿うて上る、溪流は上るに隨て益々深く、道は乃ち愈々高くなる、兩岸は茲に絶壁となりて河谷侵蝕の状ありくと見える、所謂早川火口瀬の沿道はつゝら曲りに出づつ、時には一二の急勾配もあるが、徒歩主義の人には殊に興味のある道

で、數丈の谷底を走る清流は急湍となつたり、黒き兩岸の懸崖や青き湯坂明星の山腹や、時には小澤大瀧あり、谷又谷の千變萬化、時若し秋氣身に浸む頃ならば滿山是れ黄葉、若し夫れ珍草を集めんとすれば路傍の崖には箱根羊齒や石松や、小櫻草やホト、ギヌヤ、昆蟲も亦之に戯れて居る、塔ノ澤から凡そ一里弱大平臺、富士見亭の茶屋の前に立つて數箇の谷を隔て、西北を眺むれば、ヌツと突き出す芙蓉の峯思はず絶叫せしむるのである。大平臺は一望廣潤な農村である、間道を通れば此處まで十丁足らず短縮が出来たが風景もなく道も悪く且つ急である、此處を過れば再び峡谷に入る、此處に石切場がある對岸明星の麓近くにも見る、沿道の崖は石ともつかず土ともつかぬ赭色黝色のものや、土塊石塊の混成である、是れ箱根火山の最初に噴出した集塊岩であつて、上部には薄き火山灰が覆うて居る、切り出す處の石は凝灰岩で火山灰などが水中に沈積し

箱根の名勝畫

温泉村

たものであるから其の露出も極少い、箱根火山の大部分は集塊岩である、
對岸の明星を見つゝ淺間山の麓を過ぎ行きて富士屋別館建築場の下に來
れば既直に温泉村である、大平臺から約半里、温泉村といふよりも宮ノ
下底倉といふ方が通稱で、堂ヶ島と三部落は密接した一村としか思はれ
ぬ、宮ノ下と底倉とは御用邸前の道一つ境であるし、堂ヶ島は宮ノ下の
崖下につゞく、温泉村は新村名で大平臺から小湧谷まで併合して千有餘
人を有して居る、元と底倉の方が古いが應永十三年の昔脇屋義治の男義
助は陸奥から來て木賀彦六方に潜伏したのを、安藤隼人が打取つたとい
ふ、底倉記や鎌倉大草紙にもあるが、小湧谷に向ふ間道(舊道)に有栖川大
將宮の篆額に福羽美静子の選文の碑が立つて居る、斯の如くで温泉は昔
から有名であつた、弄花の七湯枝折には宮ノ下四十戸四五町續くとある
から、文化文政の頃は頗る繁昌したらしい、底倉には御用邸があつて、

底倉宮ノ
下堂ヶ島

蛇骨川

年々竹の園生の御避暑あらせらるゝといふ有様で日に榮え行くのであ
る、今は宮ノ下が十二湯の中心で、湯屋商店大厦高樓列をなして居て、
富士屋の如きは輪換佛閣の如く和洋折衷の宏大なもので専ら外國人の滯
在が多い、奈良屋は和式で明治六年、御臨幸の榮を辱うし、自然籍紳の
投宿が夥しい、堂ヶ島は輕便な温泉場で夢窓國師閑居草堂の跡がある、
禪林僧寶傳や高僧寶傳やに見えて居る、當時は却々にすぎ山賊の庵で
あつたと見える、底倉は鹽類泉中の高温で普通客の來投に適して居る、
早川に注ぐ蛇骨川は深く地底を浸蝕して八千代橋の處にては二百尺もあ
る、其の南崖は所々に温泉が湧出して居る、此の川筋には湯の花が沈澱
して所謂蛇骨石と稱するものを形成する、さて次に八千代橋を渡つて行
けば木賀に行くが、御用邸の前を左へ折れて行けば小湧谷に行く、宮ノ
下の地方對岸の高峰は明星山である、其の下腹の石切場は凝灰岩落出で

ある、箱根最初噴出物の記念である、其の附近にある平地に大弓場や野球場があるが、更に中腹以上に眼を注ぐと山相脈層をなして東方を斜下して居る、是れ成層火山の内面であることを示すもので、山腹の急峻なものも亦内面たる證となる、此地に來れば始めて外輪山の中に入りかけたのである。

八ヶ橋から十丁河底が次第に高くなつて道と並ぶ計りになつた處は木賀である、兩岸には落葉樹生ひ茂つて秋の紅葉は最も人の賞讃する處である、殊に溪流奔騰して實に一幅の畫圖以上であると稱せらる、此處輕便な温泉場は宮ノ下と甲乙して榮えたのであるが火災に罹つて大打撃を受けたといふ。これから四丁行くと宮城野村、有名な生蕎麥も都人の口に適するか如何か、村は小さな火口原の農村で、道は此處から分岐して仙石乙女峠へ向ふ右道と、強羅に向ふ左道とある、宮城野背後の峻峯は明

木賀

宮城野

神山で明星山は其の續きである、明神山は外輪山中の最高峰で三千八百尺宮城野からでも登り得る。

底倉御用邸脇から一里強で小湧谷に着く、この小湧谷といふ所は、大湧谷と共に前は大地獄小地獄といつてゐた所であるが、明治六年八月天皇陛下宮ノ下へ行幸あらせられた時に、湯本の福住正兄翁が改名を建白して御聽許があつて、今の名になつたといふ事である。中程十五丁の處に二ノ平の農村を経る是は新道であるが、舊道を行けば多少狭く且つ急であるも廿八町に過ぎぬ、此處は明治十五年の開場である、神山の支峰小地獄山の谷底に道路から約六丁、硫氣口があつて今は漸く沈靜に傾いて居るも尚沸湯の進るを見る、それを引用して温泉を開いた、酸性收斂泉で多量の硫酸礬土を含有して居る、小地獄山の南續きは出山次は笛塚山何れも小隆起で、道は其等の麓を南進する、道の東方は鷹巢山で箱根外

小湧谷

鷹巢山

小田原と箱根
 輪山の一角である、天正小田原の役には城兵七十を置いて守らしめたといふが、山上爆裂跡の邊に稍々平地があり堤の址の様なものがある。最古道は此處に續く、西麓の一溪谷は瀧坂で畑宿に通ずる道がある、谷の彼方は二子の麓で急峻ながら餘り大きくはないが賞すべき瀧がかゝつて居る、小湧谷からの新道は最近の開通で坦々たる緩斜である、一里許で蘆ノ湯に至る、間道は頗る近いも非常に細く且つ急である然し凡そ廿丁位で着する、平坦廣漠の地に來れば蘆ノ湯で。西は駒岳、南は二子山で皆な此處から登山する、温泉は硫黄泉で硫酸アンモニウムや硫化水素の臭氣がすれども功驗著しく、殊に海上二千七百尺高燥宏濶で、箱根東北半と相摸洋を見通して、爆暑堪へ難き熱さにも涼風徐に吹き來て夏を知らず、冬季といへども駒岳は西北の風を掩ふて寒さ烈しからぬ唯多少雪の多きを以て來客稀少静寂の境である、文政の頃人家櫛比したといふ

が今も九戸六十餘人全く温泉によりて生活する、此の平地から西北に行くと僅少の昇りを行けば再び平地となつて競馬場などがある、之を横斷して進めば湯ノ花澤で唯一戸に過ぎないが硫黄氣多い温泉と湯の花の採收とをやつて居る、頗る閑靜な天地で、此處から神山に登山するのである、神山道は僅々尺許の山道であるが左程困難な道ではない、蘆ノ湯が既に二千八百尺で純粹の落葉樹帯であるから風物自ら異つて居るに、況んや更に千八九百尺を登る神山道次第に珍木奇草が増加して、同一植物も著しく形狀を異にするに至る、頂近く達した時は白や赤やの米罌、岩かいみ、寸許のリンダウ、万年苔等何くれと目新しく感ずる物が多い、高山の例として雲か霧か層雲常に被覆して眺望を缺く事少からぬが、晴間に見ゆる四方の景色得も言はれぬ廣さ、三角點の邊に立つて西を望めば手の届かん計り近く富士の峯、一飛に中腹以上に至らん心地、峻遠の

赤石山脈から甲信の諸高峰、大山丹澤山から海に連つて見える、近く眼下を見る時は始めて四千七百尺の高地にあるを知るのである、然し箱根山中の魁たる神山も案外登山の容易なるに驚く。

登山の道が樹木に掩はれない氣持のよいのは駒岳が一番である、それは北方の一面より外に樹木がないのに道は南側にあるからで、登るに隨て視界の擴大するのが實に愉快、一條の山道全部是れ草原なれば、道はなぐとも方向を過たず、蘆ノ湯からも直に登口があるが精進湖畔からが便利である、その道は駒岳と二子山との間の新道を下つて行くと風穴や供養塔婆等のある處で湖畔に來る、湖の西岸を辿ると一條の草刈道、頂上は四千三百尺二三の小丘阜があるが如くであるが十米位で、火口といふものは更に見當らず、二ヶ所に草のない處があるも爆破口に過ぎぬ、特に斜面の急な處もない漸く成層火山の要素と見ゆる程のものがない、塊

狀火山であると思はれる、さうして中央火口丘の中には最後の噴出のものであるといふ、四方の眺望は神山と大差ないが駒石といふ邊にある米つじは、盆栽として箱根中最良のものがある、此の山で最も有名な珍草は岩小櫻で寸許の愛しい小草春深く小櫻花を開くのである。

二子山は駒岳を下りた處からでも登れ、ば蘆ノ湯からでも便利な小道が開いてある、蘆ノ湯から登るのは上二子、此の方が高くて複雑に出來て居る、頂上迄大凡落葉樹の灌木と小笹で茂つて居る、峰は幾つにも分れて居て重なるものは四つある、分峰間の谷は四十米の深サで谷に向つての斜面は一層急斜である、二子も駒岳も外面の傾斜は却々急で何れも乳房火山と見えるが、成る程三十度も傾いて居れど、元來中央丘は裾野の發達すべき餘地が外輪山で圍まれて居るからで、富士山の頂上も三十度以上の處さへある、二子が斯の如きは不思議でない、それから谷の方

へは三十五度以上が多くて如何にも火口壁と思はれる、谷は三方四方へ裂開した爲めに峰が數箇に分れた成層火山の噴火口である、登山の道は三千五百尺の峰へ上る、峰から峰へと西南に移り行けば下二子に向ひあつて居る處へ出る、叢林の間小草の原が雜つて居て突出た岩石が單調を破つた邊を注意すると、幾千萬株の米躑躅いと愛らしく一二寸の高サに苔の如くに偃ふて居る、雜木の中や攀登の道傍には白堊、深山カタバミ、深山オダマキ、雪破草、芍薬、小米櫻など到底數ふべからざる草木の珍種類を見る、三十度の斜面をズリ下りて南へ向へば下二子へと續く、是れも成層火山で三峰に分れて居て、中央の平地は火口底の埋つたのであらう内斜面は一層急で四十度内外の處もある、石松や米つゝじや、日陰の蔓や羊齒類蘚苔類は、中央の峰の麓に夥しくある、火口へ登る事の一番樂なのは此の山であるが、頂上は上二子より百尺許り低いに拘らず

困難である、外斜面を迂りて南に下れば舊道に至る。蘆ノ湯から山道傳ひに二ノ平を経て一里半で強羅へ出る、山道ではあるが春秋の千草又採集に價する、梅鉢草、京鹿子、龍膽の數種、強羅は二ノ平から十丁餘りであるが宮城野からが本道である、宮城野の入口近く左へ折れる大道を約半里で達する、早雲地獄即ち神山の一支早雲山の谷底にある爆裂火口の全然閉塞した處の麓にある、温泉は一戸に過ぎねども無臭高温の閑靜な處である、早雲地獄は此處から半里、今は全く噴氣さへも絶えたれども近く爆裂した形跡が見えて、山骨赤裸々懸崖落下し來つて壯烈、一昨四十年の八月砂土走つて半里の砂礫を流したなど想像するに難からぬ、強羅までは新道があるが是れから大湧谷へは全く山道一尺許りで勾配も亦急である、西に向つて廿丁神山支谷の下腹を登つて行くと次第に俗界を離れた、千里山奥に去る心地がする、西南方大地獄を

大湧谷と改名明治五年(福住翁の發議)に回轉すると思ふ頃、硫黄の氣臭を感じた時は既に大地獄の入口に立つて居る、蘆ノ湯から山傳ひに來れば一里餘り、滿地赭白の小溪谷縦横に連亘して黝暗色の大崩谷に總合して居る、谷々の底やら丘の腹やら、數へられぬ此處彼處硫氣水蒸氣噴騰して沸々轟々、一步を過たば地獄の底かと思はれる、然しながら歩みて見れば憂ひた程でもない、轟々の音する方に立ち寄れば沸々滾々と湧出する熱湯、其の近傍を徐ろに視察すれば湯の花は美晶して黄色の花の如く、試みに指を觸れて取らんとすれば忽然として崩壊し去る、ア、残念と傍へを見れば安山岩が腐蝕して雪白色の白石となつて球形を以て剝落する、或は安山岩が溶解して長石を存し硫黄と混合するものもある、更に谷間を登り行けば日光に映じて銀白色の光を放つ、放射形の固形物、是れなん沈澱して生じた石膏の結晶で、強く觸れたらグワラリと崩れて木

狀の片々となる、噴出せる硫氣孔を熟視すれば分許の硫黄の美麗な結晶無數に構成して居る、更に甚しい轟きを尋ねると人爲の湯壺で百八十度の高温を有する硫性泉がある、之を引いて仙石湯へと送つて居る、丘を越え小谷を渡つて時に立つまで道といふ道はなけれども、谷や丘を横斷すれば處々に道の址が存する、仰いで南方を見れば、崩れた谷の頂きは冠の如くに衝つ立つて居る形の如く冠山と稱せられ神山の一局部であるが神山より名がよく知れて居る、其の麓近くから鐵索を以て採掘した硫黄を運んで來る、此方を見れば西南には臺ヶ岳、西方には小塚山、灌木満山、秋には紅葉を以て名を得たものである、此の三山の中間は今立つて居る大地獄で、神山の北半部は大爆裂によつてその横腹を突き抜いて飛び去つたのである、大地獄はその餘勢である、此の爆裂は箱根噴火の最終の勢力である、峠を下る頃から富士が見え初めて、硫黄採掘場邊が恰も

其の絶景である、更に僅か下つた處に又沸々の聲がして一面塗抹した漆喰状土間で岩石と硫黄との混合である、足を舉げて踏めば洞窟上にある如き音がして、時には踏み込む危険もある、此處や彼處の噴氣口に時には小泥火山の如きもある、箱根山を視察するならば大湧谷まで來ねば堂奥に入らぬのである、四邊を見れば小笹や薄や雑木が生ひ茂つて居る周圍の配景は頗る妙である。

雑木原の細道を十三丁ひた下りに姥子へ着く、一戸五棟の湯屋は駿州方面の田舎などからも近いのと輕便などで多く集い來る、元箱根に屬すれども却て仙石原に近い、湯は稀薄な鹽類泉で微少の滋味があつて多分に飲用すれば下痢を來すが、無臭清澄の泉が岩間から湧出して細い乍らも湯瀧となつて垂下する、瀧壺は自然の儘の湯漕で底の岩石が明瞭に見える心地よさ、凡そ十二湯中各々其の長はあるが此の湯壺は到底競争者が

ない、湯屋の背後は赤鐵鑛や褐鐵鑛を含んだ集塊岩で一面の赤褐色、此の土塊中に木葉の形を印痕したものが出る之を木の葉石といつて居る、元より化石ではない現在存在する櫛の葉の類であるが一寸珍しい。

姥子から僅か下れば雑木絶えて草原となる、蘆湖、外輪山、富士に配しつゝ湖畔につゞく原野を見ると、放棄した牧牛の三々五々沃草を漁つて居る、下り行く斜面は神山の泥流で、水蝕之に違うして小谷も出來て居れば小丘もある、一面の展開は是れ仙石原村即ち箱根火口原の最大のものである。十五丁足らずで湖畔の一漁家を見出す、此處は箱根町に渡る波止場で湖尻、といふ處である、湖水は逆川となつて狭長な溪流を次で流出する、一里許り東北流して仙石原村の南に至つて急激に東南に屈曲する。村は六十五戸四百人足らずの山村であるが、農林の産豊かで渡世をやつて居る。宮城野から來れば一里十丁、近來道の修理が出來て稍々

碓氷峠

乙女峠

湖尻川の
疎水

小田原と箱根

通ひよくなつた、宮城から十丁許の處に碓氷峠といふがある、久米氏の所謂日本武尊の古跡である、古事記によりて尊の通路を尋ねたら此處が順路で説明も便利である、仙石から數丁で乙女峠の麓に来る、峠は十丁内外であるが火口壁であるから随分急峻である、蛇行した道を頂に上ると有名な乙女峠の富士の景が展開する、富士の裾野は箱根の裾野と連つて、その裾合谷に點在せる一條の白線は、道か黄瀬の川水か、町や村や將た森や煙霞の中に隱見する、漸々高くなる彼方を見れば一大雪峰が雲上から覆ひ掛からん計りで、天姿英風誠に莊嚴の極秀麗の粹である、霞縫ひ行く汽車の煙は空谷を破る汽笛の音に出没し、近く此方の峰や尾に牧童鎌を負うて生きた菅公を書き行く、書の様な中を曲折迂廻して御殿場へ二里弱である。

湖尻から西北へ行けば長尾峠、西南に行けば湖尻峠であつて何れも駿東

蘆ノ湖

郡へ通じて居る、湖尻峠の登り口を視察すると小入江に迫つて水門がある、峠を抜いて駿東郡の深良村に至つて湖尻川となつて居る、之れで深田新田を灌漑する、此の疎水は寛文八年八月着手で、江戸の商賈四人の請負で、湖水を去る四十六間の處から掘り初め、一方駿河の方面から掘つて同じ十一年四月鑿成した、延長實に十一丁、深田村に新田開墾の爲めであつて、二百五十年の昔に人夫一日一人八十文、積つて八千兩を費したといふ、庶民で而かも幼稚の器械や方法で、能くも成功した事と感服の外はない、一閘門の上下によつて水量を調節するから、自然湖水面に影響するといふので、神奈川静岡の争を惹起した事もある。

箱根最初の大火口が一度閉塞した處へ、中央丘の諸山の噴出して火口原を生じた、その深い處が蘆ノ湖で浅い處は仙石原である、湖水は別名の鑊字ノ池の名は當つて居るか如何か分らぬが、一寸瓢形を成して居る事

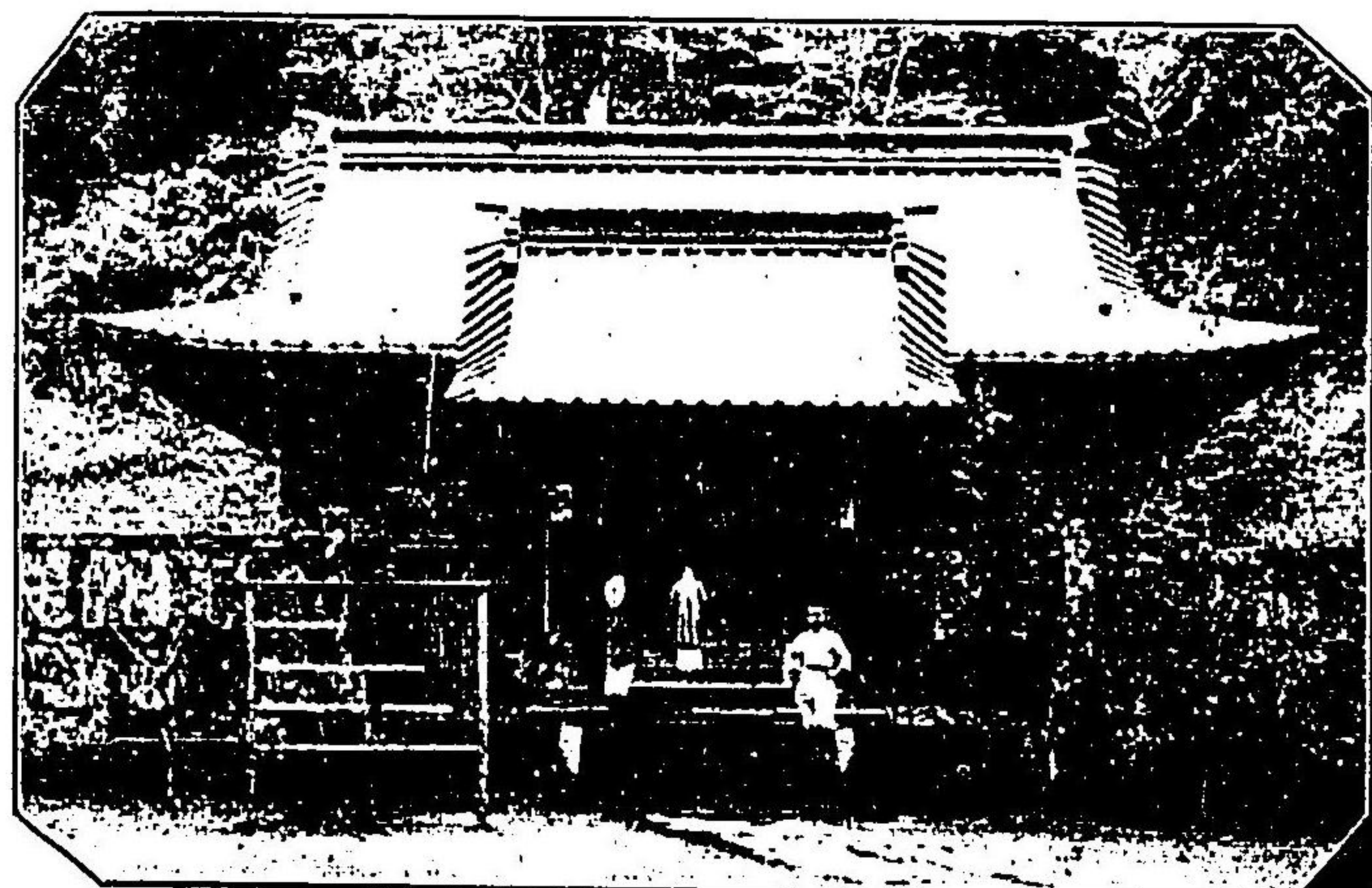
箱根の名勝舊蹟

小田原と箱根
は定評で、其の壘首即ち口の處から火口瀬を作つて早川となつて居る、須雲川の蝕削が烈し處を見ると舊は此の方に流れて居た様で二子の噴出などが遂に今日の様に變化せしめたのであるといふ、湖面の最長南北一里半、狭長だから巾は廣さも半里に過ぎない、周回すれば四里半に餘る、湖水の景を絶叫するは何れかの方面から時に達した時の感で、相摸洋かと思つた詩人のあるも無理でない、七津五名木の名所があるも寧ろ赤壁賦中の人となるのが最良策で、湖尻からでも箱根からでも八十錢を投ずれば數人と共に縦斷の目的を一時間で以て達するのである、中央丘は言はずもがな蘆湖隨一の勝と稱せらるゝ逆さ富士、羽化登仙はせずとも舩を叩くの快は是れに限る、唯風の烈しい日や霧の深い日は、四邊の眺望も掩はれて或は波が高く面白からぬから快晴を撰ぶがよい、湖底の最深地は東南部に在つて五十丈もあるが大抵は三三丈、湖中處々に木材

湖畔の道
が埋もれて居て、處によると三三間の杉などが亂立傾倒して居る、それで見ると湖盆の變化が比較的新しく且つ確實に認められる、湖底淺き處を見ると赤腹等の游泳するのを見るが、御料地である上に近年鱒の養殖を行はれたから濫に垂絲の樂を食ふことは出来ないけれども、湖畔の旅館には食膳必ず望を充たすを得るであらう、底部の處に一半島があつて堂ヶ島と呼ぶ、丘陵の上巍々たる洋館の傍に莊嚴雅趣ある和風の建築が見える、此は是れ離宮で、機會を得て拜觀を許された時には自ら龍宮に入つたかと思はれる。

湖畔は西岸も通れぬことはないが東岸の方がよい、姥子から元箱根まで二里許であるから眞逆道遙といふ譯にも行かぬが、神山や駒岳の裾野が篠原となつて居る中に、近來御料局の殖林が行はれ、杉の林が目立つて見え出した、切り取つた篠竹は竹行李や團扇の材料となつて輸送せられ

箱根神社



本殿



石段

箱根神社

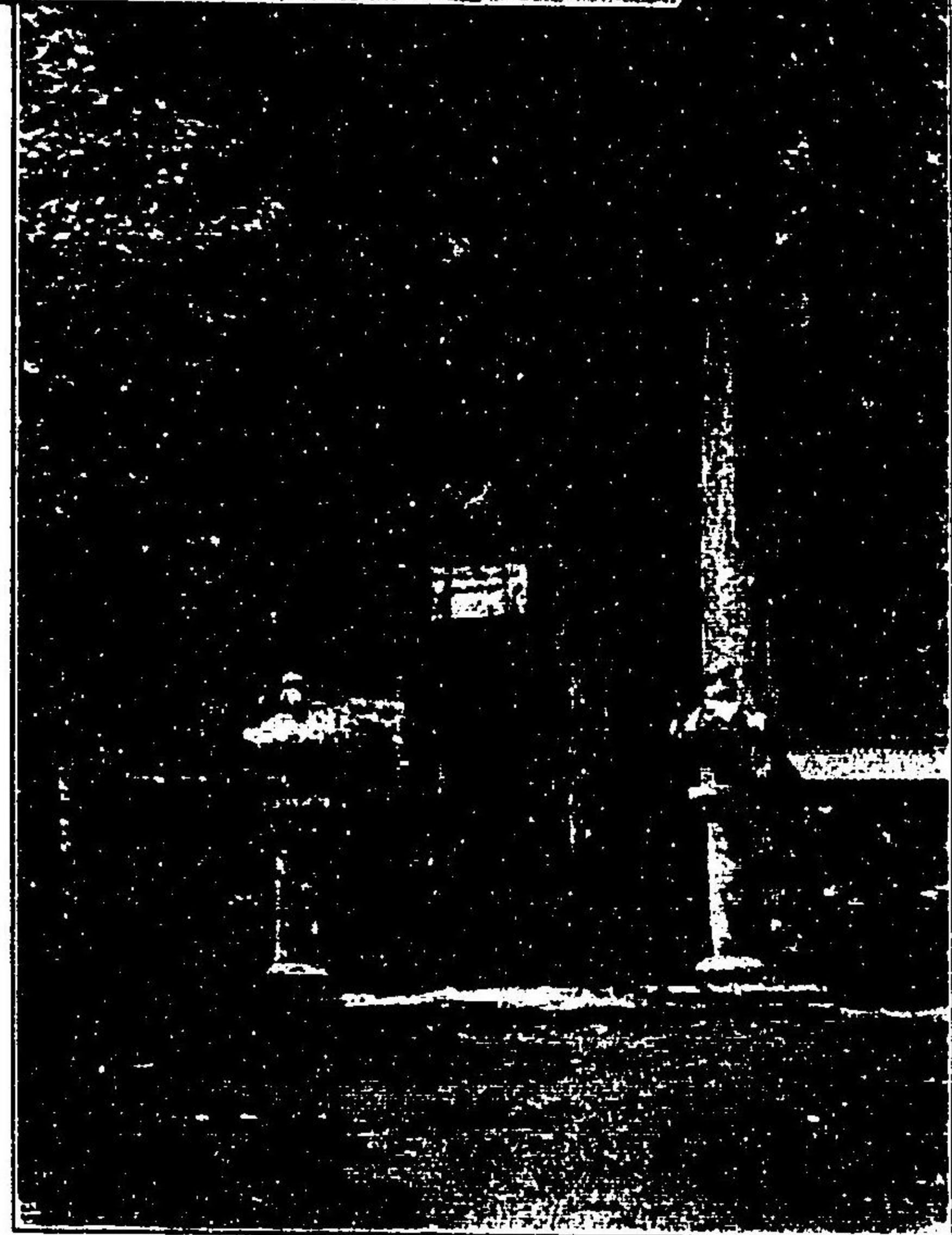
小田原と箱根

る、御料局の役員や人夫が所々に庵を結び、時には別荘の如きが建てられて道程の單調を文とり、湖岸の景や富士の峯で左程遠いとは思はぬ、二子山の程近くに鬱蒼たる森は縣社箱根神社である、數百の石階を上り行けば如何にも神さびた境に入つた様である、地域六萬坪祭神は瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花咲耶姫の三柱で孝照の御宇とも武内宿禰の創建とも古傳に説くが、社傳によれば天平寶字元年萬卷上人の勸請だといふ、坂上田村麿蝦夷征伐に表矢を上り、弘法大師巡錫の砌大伽藍を營み、嵯峨鳥羽兩朝の奉幣があつたともいふ、正史には源賴朝石橋山敗戦の時逃れ來つて別當行實に據つたのであるが、此時以前既に勢力ある神社であつた事は知るに難からずで源氏幕府を開いた曉にも賴朝自ら參拜したり又代拜を出した事も吾妻鏡の明記する處である、元仁二年不幸回祿に罹りて北條泰時造營し、鎌倉管領の時も、後北條氏も奉請を怠らなかつた、

箱根神社



本殿



石段



箱根神社

小田原市箱根

る、御料局の役員や人夫が所々に庵を結び、時には別荘の如きが建てられて道程の單調を文とり、湖岸の景や富士の峯で左程遠いとは思はぬ、二子山の程近くに鬱蒼たる森は縣社箱根神社である、數百の石階を上り行けば如何にも神さびた境に入つた様である、地域六萬坪祭神は瓊々杵尊、彦火々出見尊、木花咲耶姫の三柱で孝照の御宇とも武内宿禰の創建とも古傳に説くが、社傳によれば天平寶字元年高卷上人の勸請だといふ、坂上田村麿蝦夷征伐に表矢を上り、弘法大師巡錫の砌大伽藍を營み、嵯峨鳥羽兩朝の奉幣があつたともいふ、正史には源頼朝石橋山敗戦の時逃れ來つて別當行實に據つたのであるが、此時以前既に勢力ある神社であつた事は知るに難からずで源氏幕府を開いた曉にも頼朝自ら參拜したり又代拜を出した事も吾妻鏡の明記する處である、元仁二年不幸回祿に罹りて北條泰時造營し、鎌倉管領の時も、後北條氏も奉請を怠らなかつた、

元箱根の
横籠村

大永三年氏綱再建したが、小田原攻の時亦祝融氏の禍に罹つたから、現在の建築は慶長十七年のものである、徳川時代亦上下の尊信厚かつたが故に、献納の古物や古文書の現存するもの一二にして止まらずで、殊に其の鐘は永仁四年の鑄造で、我國の古銘として珍重せられて居る、祭日は八月一二日瓦葺朱塗の社殿が霧藻の下がつた古木の森に相映じて居る有様を参拜せる人々が皆又神域の人と思はれる、右階左側の平地は金剛王院東福寺の跡である、其の寶物等は皆な社務所の保管する處となつて居る。

神社から三丁で人口二百五十の山村がある元箱根村といふ、神社の附屬除地であつたので古來存在したのであらう、徳川氏が箱根驛を主要視するまでは、等しく峠の要所であつたが、宿の方が盛になつたにつれて参拜専門の要地となつた、斯くて神社と終始して居たが今も旅客の投宿の

箱根の名勝遺蹟



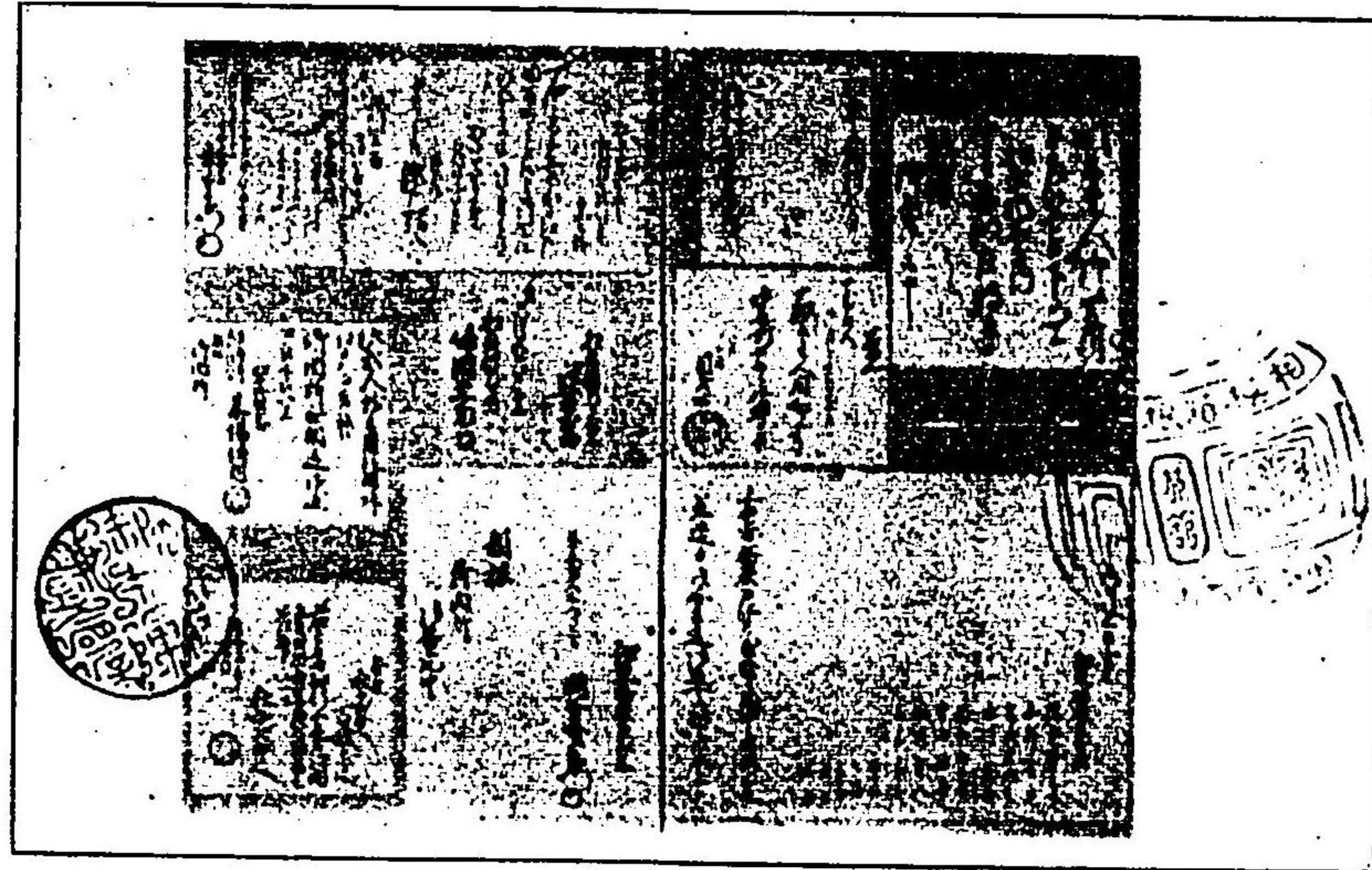
箱根關址

小田原と箱根

用意はなくて一寒村たるべき筈である、然るに村是宜しきを得て共有財産を以て比較上縣内の秀抜となり、平日の公租會て徴收した事がないといふ、漁業挽物細工は生活の主業であつて太平を樂んで居る、實に縣下の模範村である、離宮に近き湖岸の地藏尊のある邊を賽の河原といふ、此處で東海道と合して堂島半島の南を通つて箱根町に至る約十丁、兩側には數丈尺の何百年と想像の出來ぬ杉木立で、仰見ればフウランやセツコクや、ツタ漆、霧藻が寄生して苔の蒸した巨木日光を見ぬ幽邃である、數十歩の外は篠竹灌木の柴山の裾とは思はれない、その雜木山は即ち要害山で東一帯は其崖に沿うて居る、西を窺へば一碧の湖水が岸を浸して居る、一夫之を守れば百敵も防ぐに足る處、所謂函谷關も置ならぬ天下の嶮に據る地である、關所は實に此處に置いたので、址は並木の終局地、箱根宿の入り口にある、萬馬嘶天際、叩關人作群と昔は曉の六ツから暮



箱根關所址



箱根驛石内氏所關所手形



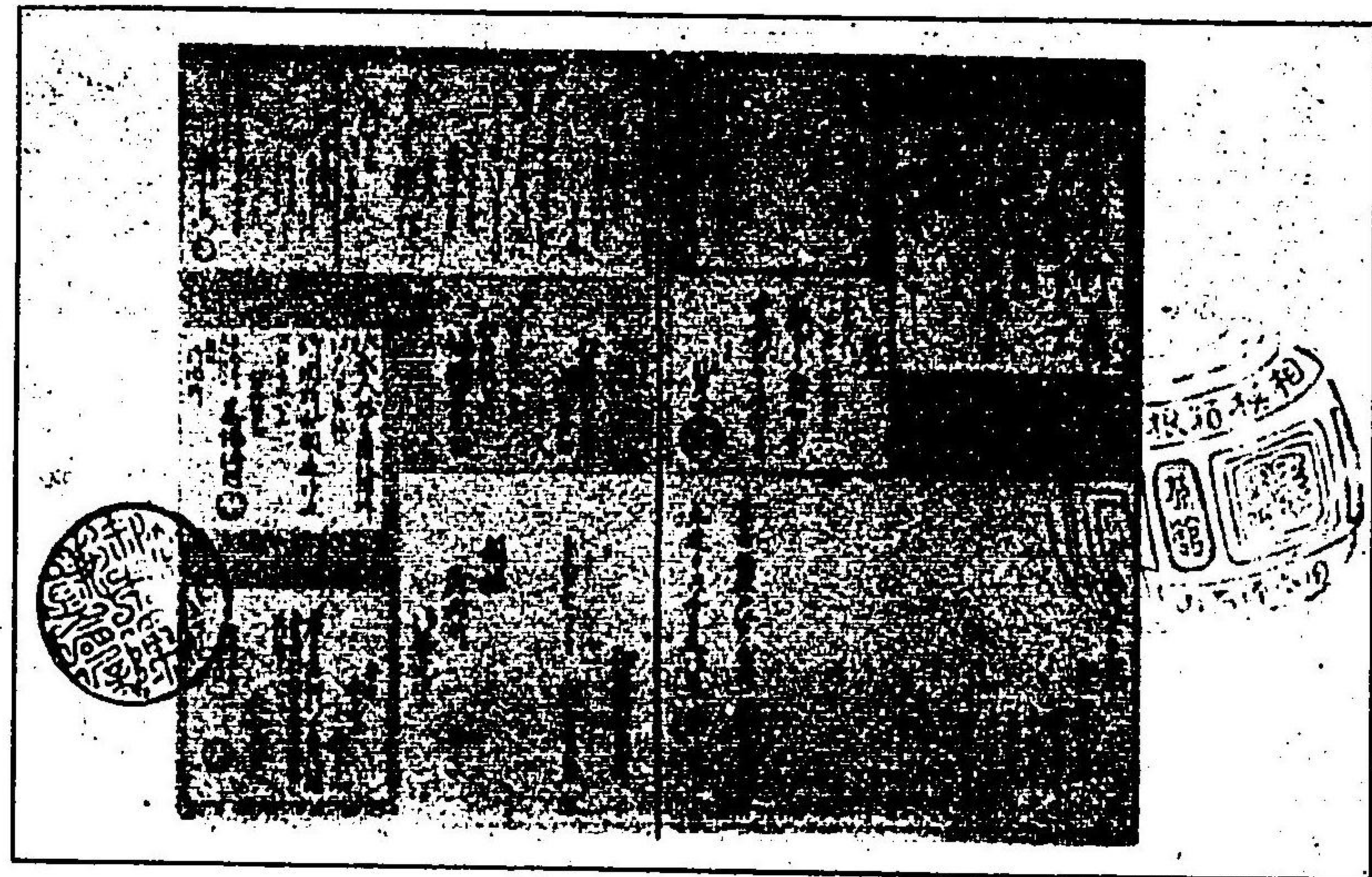
箱根關址

小田原と箱根

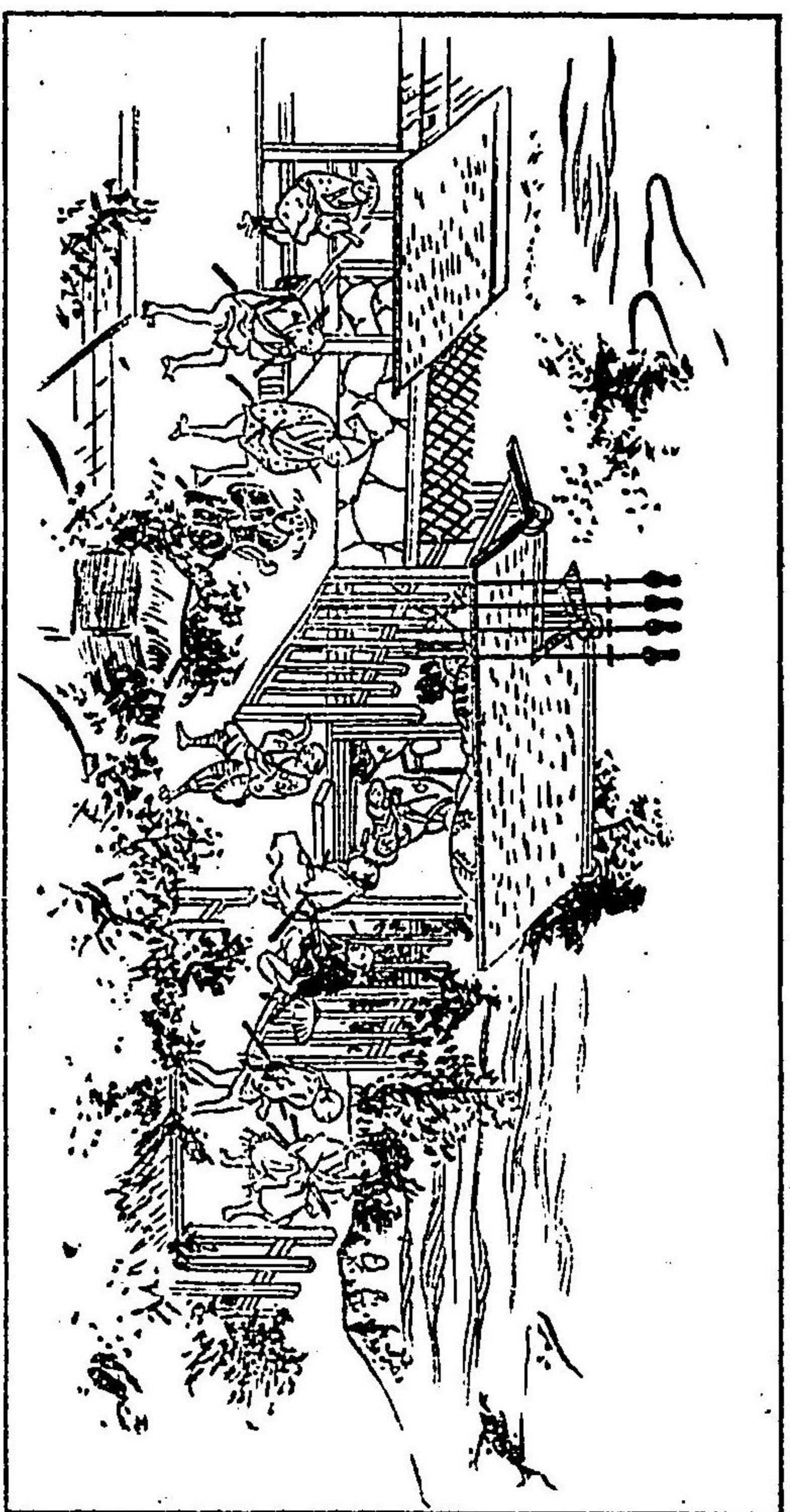
用意はなくて一寒村たるべき筈である、然るに村是宜しきを得て共有財産を以て比較上縣内の秀抜となり、平日の公租會で徴收した事がないといふ、漁業挽物細工は生活の主業であつて太平を樂んで居る、實に縣下の模範村である、離宮に近き湖岸の地蔵尊のある邊を賽の河原といふ、此處で東海道と合して堂島半島の南を通つて箱根町に至る約十丁、兩側には數丈尺の何百年と想像の出來ぬ杉木立で、仰見ればフウランやセツコクや、ツタ漆、霧藻が寄生して昔の蒸した巨木日光を見ぬ幽邃である、數十歩の外は篠竹灌木の柴山の裾とは思はれない、その雜木山は即ち要害山で東一帯は其崖に沿うて居る、西を窺へば一碧の湖水が岸を浸して居る、一夫之を守れば百敵も防ぐに足る處、所謂函谷關も重ならぬ天下の險に據る地である、關所は實に此處に置いたので、址は並木の終局地、箱根宿の入り口にある、萬馬嘶天際、叩關人作群と昔は曉の六ツから暮



箱根關所址



箱根驛石内氏所關所手形



(鞍所巻繪道海東藏所冊子元秋) 園の所願御根箱

箱根の名勝巻版

の六ツまでのみ開かれた門であるから、同行の人士と雖も後れて達すれば時と共に關せられた、止むを得ず關門の闕に立つて追ひ來るを俟つた珍談も演ぜられたのである、關所の起原は頗古いが此地に設けたのは承久の時にも見えて居るし、康暦六年には此の關所を置いて征錢を圓覺寺の修繕料とせる古文書もある。應永、永享の頃にも箱根の關はあるが、最も聞えたのは徳川氏である、江戸幕府此天下を有するに當つては、畿國と東國との關係、諸侯制御の方策から東海道に大なる注意を施した、尙更夫人を質とするには關所の取締嚴重なるべきは明瞭であるが、關東四邊の關所の中箱根を於て最とするので、白河や須磨の關はいざ知らず、關所といへば箱根、箱根といへば關所であつた、何人と雖も誰何を免れぬ最嚴最酷の關所であつた、通行手形がなければ金輪奈落、首とつりかへでなくては通れぬ、此の關所の預りは譜代の重臣大久保小田原侯であ

つて、關所役人交替で毎日見張つたのである、今も石壘や礎石等が残つて居て建築物の大體の位置を知ることが出来る、舊と兩側に舍營したものであるが湖水の側の庭木であつた松が餘り大きくもないが一本立つて居る、幾多の喜劇悲劇を見た風雨多年の物である。

●箱根町は箱根道の開かれた前に此邊を通つたとすれば頗る古いが、若し乙女峠や、長尾峠などから湖畔を通つて二子山の北に出たとすれば、蘆川の宿は元箱根の地によ、延暦の昔には何れへ通つたか、さて蘆川の宿は措いて全く正しい此宿の開拓は其の基礎を元和四年に置くのである、松平正綱は命を受けて山野を開き三島、小田原兩町民を遷して新驛を作つたから、今も三島町、小田原町等の字がある、勿論一筋町であるが、九十戸四百九十人の街村を成して居る、三島へ三里廿八町、小田原へも殆んど同じで達する、今は交通の要衝の影もなくて凡て足柄山の北方の

鐵路に奪はれた、斯くて其の盛衰を徳川氏の運命と一つにしたのであるが、聖代の賜は死命を制して活路を開いた、漁業挽物細工、湖上遊覧者殊に夏時の観光新緑紅葉の眺めに、紳士學生は固より馬に車に令嬢まで送り迎へらるゝ有様で、交通機關の設備具はり清酒の旅舎は爲めに開かれて居る。

小田原と箱根

箱根八里は天下の嶮であるが朝に三島を去つて夕に小田原に着くのは恰も拵へた一日行程である、玉くしげ箱根の山を急げとも、猶あけ難き横雲の空には既に山麓を登つて居なくてはならぬは、敢て鎌倉時代の旅行の困難でなく、徳川時代と雖も又ひた走りに道を急いで越えたのである、然しながら日出で、三竿旅舎を起きた位でも夕陽未だ杵を下さぬ頃に既に到着するのは難事でない、勿論足柄の方が安樂ではあるが里程は倍加するから一得一失は免れぬ、それで近距離の方を徳川氏は採擇して三島

と小田原とを發着點としたのである、沿道一里塚に連続して松杉の並木を植ゑたが、今は數丈の大を致して居る、殘存せる並木程昔を感じて幽寂の念を興さすものは少ない、然るに漸次枯死すれば之を補ふことはなく、殊に現時は三枚橋から畑宿まで千百廿三本を、四萬四千圓の紙幣に替へられて四十一年八月から伐採して居る、切り取つた跡の慘な事と言つたら譬へやうがない、舊道を通行する時は並木のあるので寂寥の感と追憶の念との起る爲め、淋しみの快感があつたのであるが、今は平凡の山道となり果つる事である、併し小田原附近や、箱根町や、三嶋附近には霜雪に堪へた老木が列をなして名残を留めて居るし、湯本三島間の道路敷の稍々急な處には、一二尺の安山岩が敷詰て石疊としてある、二間餘の道中一面に敷いたる石は數千萬人の足に磨けて數千萬足の油が塗られた様である、雨の朝雪の夕にはツルリ〜と沁るし、乾いた日中には

箱根の名勝舊蹟

小田原と箱根

足を痛むるから要なき事してけりとつぶやく人もあるが、若し一度之を取り去つたら、一滴の豪雨も道を溝とし一年ならずして溪谷となるのである、加之小石一面に擠がりて足の裏の痛きこと限りなくなる次第で、要なき處に要はある、是は海道開通の初から有つたのでなく、漸次に置かれ次第に發達したもので、殊に文久の公武合體の術策として迎へ奉つた皇妹和宮の御降嫁の時大修理を加へたのが現在のである。足柄箱根共に其の要害である事は、古來何人にも分りきつた問題で、源平の頃にも承久の役にも此嶮守備の案は具せられたのである、南北朝新田足利角逐の時にも義貞は直義と戦つて西走し、顯家亦通過した時も、乃至は早雲小田原占領の時にも通つた筈で、十六夜日記の著者阿佛尼の昔から此道であつたか否かは分らねども、東は陽坂を通り西は三島を通つたのであらう、大関は箱根の東南鞍掛山から關白道へと向つたが、

伊豆方面

徳川氏の開いた道が現今の道路の正しい創めである。箱根町の南方へ山道があつて鞍掛山の半腹を登つて、東折すれば關白道で山の尾づたひに壘岳の東腹を通つて石垣山へと出るのである、又町端から眞直に南に行けば土肥の領分で門川や熱海へ行ける、右へくと進み行けば所謂十國峠で近隣十ヶ國を眺望すといふ、此峠一名金山と稱して山道は多少の困難はあるが、熱海で一泊する積りならば探勝の士の見逃すべからざる景である。

箱根町から西方三島へ行くも亦却々の興味がある、一步峠の頂を踏んだ時サツと吹き來る富士の風雲、さては甲駿遠の諸山から次第に豆州に展開して遂に駿河灣の天地に入る、道は馬の脊の如き高みにあるから、小田原から來る如く谷底に沈む心地はなく、常に視界は廣いのである、峠から下つて行く二つ目の平地は施行平と呼ぶ、四顧草原の中に茶店が一軒あ

箱根の名勝解説

施行平

小田原と箱根

る、茶屋の亭主の言ふ所によれば所謂遠藤先生の紀念の爲めに施行して居るので、茶湯の施行に預つて一厘半毛の謝儀は取らぬ、其の來歴を尋ねると、曾て遠藤某通過の砌馬に豆を施行したといふ此地の話を聞いて、通行の人馬の爲めに一椀の湯水を施さんとした、さて弟子達はその意を奉承して明治十二年以來三四人宛交替して斯くの通りであるといふ、峠から一里許で中山新田で此處に山中城址がある、後北條氏の持城で本丸二ノ丸の舊形空壕が顯然と残つて居るが、大部分小笹に埋もれて充分に踏査が出来ぬ、永祿十二年武田信玄は之を陥れたといふ、天正十八年三月廿九日には、唯一日で秀吉軍の陥る處となつた、それも其筈で此附近には同形の小丘が澤山あつて、何方を取つても陥るに左程困難と思はれぬ地勢である、此處から笹原、三ツ谷、市山新田、塚原を通つて三島町に着く、満山殆んど茅葺や、小笹や灌木で峠近くまで山畑を開いて居る、

山中城

三島

其の串通する小部落は、何れも現状萎微振はざるが如くに見える、舊幕宿驛として發達したものが、農耕伐木の業を便として居るからであらう併し通過の際には著しく驛宿風の遺影が多方面に残つて居る。

坂路を下つて麓から並木の道を半里も行けば三島に着く中に一里塚が残つて居る、三島は往古の國府の地で三島明神の盛名によつて遂に現名となつた、官幣大社三島神社は延喜式の名神大社で、祭神は王鏡入彦殿之事代主神一説に(大山祇神)實に伊豆の一宮である、賴朝祈つて成功し次で崇敬頗る盛となつた、後北條氏徳川氏累世之を敬仰して明治に至り、四年五月に大社となつた、市街は人口約一萬宿驛として嶺西の重鎮であつたが東海道線鐵道に外れた事は小田原と同一の境遇に陥つた、今は三島驛から豆相鐵道を以て南方の支線に沿うて多少回復するを得た。

箱根の名勝遺蹟

舊道を湯本へ

は右に新道は左に向ふのである、若しも新道の平坦なる方へと志す時は元箱根から北行する、三十九年改修した大道で蘆ノ湯を経て宮ノ下へと出る、東海道は二子山の東南を通つて居る、賽の河原から僅か上りで後は全然下り一方である、石疊の道はこれから畑宿まで一里の間つゞいて居る、二子山の正南まで下りると平地がある、生ひ茂れる茅原に點線狀に礎石が見える、往時は兩側に茶屋が並列して居て其酒を賣つて居たで名を甘酒茶屋といふ、半里許りを下ると榎の本に茶店一架、力餅を以て名を賣つて居る、是ればかりは昔の儘の包み餅、畑宿から毎日出店をして居るのである、茶店から下方谷の彼方に見える巨杉の地は畑宿である數丁で此處に來ると、宿驛風の殘存著しくて今も客の休息を呼ぶ、然し箱根は産物遙かに三島方面に比して豊富であるから、概して安靜の狀が發露して居る。

力餅の茶屋に立つて店先に注意すると、藁束の吊したものに串さしの小蟲の干カラヒタをさして居る、試みに挽きわり板の腰掛に力餅を喰つて其の名を聞けば山椒魚と、何處の如何なる處に産するかと訊けば直ぐと向ふの谷間にと、やをら立つて谷間を覗へば是は如何に、數百尺の谷の中縁深き小丘が川中島となつた邊、箱根外輪の一部は著しい蝕剝を受けて早川火口瀬の新進の谷に比べものにあらずで、紅黃の秋葉に照り映る夕日の夜は、山椒魚の事を打ち忘れて見とれるであらう、その谷底の奥深く産する水陸兩棲の小蟲であつて、形恰もイモリの如く唯腹の赤からぬが相違の點とも見るべきである、山陰道産のハンザキと同じ類で體はそれより頗る小さい、殊に此處のは指先を熟視すると爪の存在することである、畑宿の上流には何時でも獲れるが春が最も好時期で、夜中が又最良の捕獲時である、案内者を頼んで炬火を提げ溪流に沿うて上るとき

小田原と箱根

は、彼方此方に匂ひ上るを捕ふるのである、斯くして充分の注意を施さば生擒するのも困難でない、それから又何に効あるかを訊けば曰く小兒の薬と、串に刺したのはそれで全形の一斑すらも覗ふことは出来ない。畑宿から二三の小道を西方の坂路に上るときは末は合して瀧坂となる、蘆ノ湯へ行く近道は新道よりも此方が近く、湯坂山よりも道が好い、徒歩人は今は多く是を取る、鷹の巣と二子との間の臺地へ出る半里餘。畑から下りて數丁行けば小溪流を渡る、此處は鷹巢二子間の泥流の堆積した平地である、此地に神代杉を採掘して居る、所々溝渠を穿ちて發見するので、一度見出せば數本も出ることがある、湖底の杉の存在と同じく此の邊にも杉材の繁茂して居たのを、二子などの噴出で神代の昔埋没したのである、未だ褐炭とも亞炭ともなつては居ねど、黝暗色を呈して頗る滋味の雅趣がある、箱根の名産は寄木細工である、寄木細工の骨子

は神代杉である、是れがなければ箱根細工は平凡である、シホデや、チサの木や種々雑多の樹木を以て、種々雑多の玩弄品、日用品、裝飾品を作るが若し神代杉の配合がなくなれば箱根としての價がない、他の樹木は何處にでもある、近來寄木細工を以て工藝品より進歩して、美術的の製作品を出すに至つたのは箱根細工の前途頗る有望である、唯々神代杉の量はその所々に出るが限りなくあるであらうか。

此邊から十丁足らずで須雲川を渡る、畑宿から廿丁で須雲川といふ一部落に到着する是れから又一里弱で湯本茶屋に來るのである、須雲川の谷を以て早川の谷に比する時は、道と河底との垂直差は却て須雲川の方が烈しいに拘らず、早川の方が谷底深く思はれるのは、早川は現在著しく浸蝕しつゝあるので兩岸の崖が急であるから谷底が見難いからである、須雲川の浸蝕の後兩岸の崖は次第に蝕剝せられて船底形となつたから、道

箱根の名勝奇蹟

と川との間に部落を生ずる迄に至つたのである、兩火口瀨の比較は種々の興味ある研究となるが今は略して置かう。

須雲川の北岸鷹巣や湯坂の中腹に一線を引いた様に見えるのは電氣會社の水路である、山腹に美しい柱狀節理の露出も見えるが、須雲川部落の對岸にある山腹の灌木林を注意すると、一小亭の邊飛瀑翻る呼んで初花瀧といふが、此方の路の傍には勝五郎のゴザ掛け石もある、案内者などを頼んだ時は勿體らしい説明に恐入る、それよりは秋の紅葉の盛の頃、箱根全山黄緑相彩色する時、發電所邊から數丁の上流へかけて一面の紅葉である、人多く木賀や小塚山の紅葉を賞するが、到底此の邊のものに比較にならぬ。

箱根小田原地方遊覽の栞

小田原箱根地方に於ける名勝古蹟の案内は前に詳しく述べたがなほこの地へ遊覽に出掛けられる人の爲に實地の題目に入つて申しておかうと思ふ。

元來箱根といふ土地は山水の美に富めるばかりでなく温泉があり歴史上地理上の趣味に富んでなる土地で東京から近い所であり交通の便も完備してなるから夏期の避暑に適するばかりでなく四季の眺めに適してなる秋の紅葉や冬の遊獵にもよい土地である温泉は各種の種類のもものがあつて各病痾を醫するに宜しいのである。

湯本 單純泉 百度 福住(萬翠樓)。小川。湯坂館(萬翠樓別館)。
塔澤 鹽類泉 百九度 環翠樓(鈴木)。洗心樓(玉の湯)。一湯(小川)。

新玉湯(長谷川)。福住(長谷川)

宮ノ下 一三三 鹽類泉 百十四度 富士屋(山口)。奈良屋(安藤)。龍雲館(安藤)。

底倉 同上 百四十五度 萬屋(澤田)。梅屋(鈴木)。仙石屋

堂ヶ島 七九〇 單純泉 百十八度 近江屋(坂井)。大和屋(森)

木賀 一〇七〇 鹽類泉 百十三度 龜屋(依元)。仙石屋(宮内)

蘆ノ湯 二七六〇 硫黄泉 百十八度 松坂屋。

姥子 二八七〇 鹽類泉 百十三度 秀明館(西村)。

箱根小田原地方遊覽の栞

小田原と箱根

仙石 一三〇度 硫黄泉 七十二度 下ノ湯(石村)。
 小涌谷 酸性泉 百八十度 三河屋(榎木)。開化亭(同上)。
 強羅 同上 勝股(清水)。
 湯花澤 硫黄泉 百十五度 仙望閣(依元)。
 是等の温泉をめぐるとは約八里にて健脚なれば一日にて可なれども名所舊蹟を探り地形を察するなどの事をなせば数日でも六ヶしいこの温泉場を連絡する通路は箱根新道であるこの道は東海道の新道と湯本で分岐して早川の沿岸を通つて宮の下に至りこゝで更に二分して一は蘆湯を通じて元箱根に赴き一は宮城野に向つてなるこの路は平坦なる大道で人力車も自由に通ずる事が出来る駕籠ならば一層安全で道が近くて早く達せられる(宮ノ下以上は少々困難ではあるが)東海道は須雲川畔を通じ二子山の山肩を通つて箱根驛に出るこの道は石が敷きつめてある爲に滑ることはないが車は到底通らないこれから三島へ同様の道で通じてなる蘆湖上は箱根驛から湖尻又は元箱根へ船を雇つて行くことが出来る

湯本停車場より各温泉場に至る里程及び車賃

塔 澤 五丁 十二錢 人力車又は駕籠の人夫一人の價
 宮の 下 一里廿三丁 五十錢 人力車は普通入夫二人を要し籠は通常四人
 堂ヶ 島 一里廿四町 五十五錢 道行には一人の助手を要す

水 賀	一里三十町	六十錢	
小 涌 谷	二里十町	七十五錢	
蘆 湯	三里	九十五錢	
元 箱 根	籠道(二里三十三丁)	車道(四里)	一四十二錢
箱 根 町	籠道(二里二十八丁)	車道(四里九丁)	一四十二錢
姥 子	三里	強羅よりの駕籠を合せて	一四十二錢
大 涌 谷	二里二十九丁	同上	九十錢
仙 石	三里	一圓	
宮 城 野	二里	七十錢	
強 羅	二里半	九十錢	
蘆湖船賃			
箱根町元箱根間	二人	七十錢	九十六錢
箱根町及湖尻間	二人	四十錢	六十六錢
元箱根湖尻間	一人	同 船子付一艘片道	一圓三十錢
		一艘同	九十錢
			往復 一圓八十錢
			同 一圓十錢
食馬料(宮下底倉より)			
箱根上下	一圓四十錢	熱海行	二圓五十錢
道了橋現	一圓六十錢	御殿場	一圓六十錢
		湯 本	一圓四十錢
			一圓二十錢

箱根小田原地方遊覽の乘

小田原と箱根

行		本	
後	午	前	
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五
新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五	新沼 八、七五

直行電車發車時刻表

行 本 湯		行 津 府 國	
瀧車國府津着	電車國府津發	電車湯本發	瀧車國府津發
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より
新沼より	新沼より	新沼より	新沼より

◎印は瀧車横須賀線接続 ▲印は一、二急行 □印は二、三急行 △印は三急行の符

直行電車乗降所

酒匂松崎園前。 小田原町本社前。 小田原町熱海道入口。

小田原熱海間列車發着時刻表		(明治四十二年五月二十五日改正)	
東海道	同府津若上	同浦發	同熱海着
發地時刻	府津發	浦發	熱海發
四、五九	五、四六	七、〇八	七、四〇
五、四六	六、一五	七、〇八	七、四〇
六、一五	六、二五	七、〇八	七、四〇
六、二五	七、〇八	七、四〇	七、五〇
七、〇八	七、四〇	七、五〇	八、〇三
七、四〇	七、五〇	八、〇三	八、一三
七、五〇	八、〇三	八、一三	八、四三
八、〇三	八、一三	八、四三	

箱根小田原地方遊覽の乘

箱根小田原地方遊覽の乗

小 田 原 行					輕便鐵道		熱海發	
午後 二〇〇	二一五〇	九三四	七二四	五三八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
二四五	二二三六	二〇一九	八〇九	六一九	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
二五三	二二四四	二〇二七	八一七	六二七	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
三〇四	二二五五	二〇三八	八二八	六三八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
三三五	二二六六	二〇九	八五九	七一〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
四二三	二二一六	二〇〇〇	九四九	八〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五二七	三三〇七	二二三四	一一〇六	一一〇八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五五九	三三〇三	二二三四	一一〇六	一一〇八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
新橋行 六二五	新橋行 五四〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇
新橋行 六二五	新橋行 五四〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇
八八八	七八八	七六〇	六五五	四三〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五〇〇	一一〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇

熱 海 行 (下)					輕便鐵道		熱海發	
午後 二〇〇	二一五〇	九三四	七二四	五三八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
二四五	二二三六	二〇一九	八〇九	六一九	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
二五三	二二四四	二〇二七	八一七	六二七	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
三〇四	二二五五	二〇三八	八二八	六三八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
三三五	二二六六	二〇九	八五九	七一〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
四二三	二二一六	二〇〇〇	九四九	八〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五二七	三三〇七	二二三四	一一〇六	一一〇八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五五九	三三〇三	二二三四	一一〇六	一一〇八	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
新橋行 六二五	新橋行 五四〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇
新橋行 六二五	新橋行 五四〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇	新橋行 三三〇
八八八	七八八	七六〇	六五五	四三〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇
五〇〇	一一〇	〇〇〇	〇〇〇	〇〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇	二二〇〇

小田原と箱根

小田原と箱根

(り上)	
四、一〇	
四、五五	
五、〇三	
五、一五	
五、四七	
六、二七	
七、五九	六、〇八
六、五五	六、五〇
七、三四	七、一七
八、三六	七、二七
九、〇〇	八、三三
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇
九、〇〇	九、〇〇

◎印は渡車積須賀線接続 ▲印は一二等急行 □印は二三等急行 △印は三等急行の符

小田原電車
會社より

地名	距離	人力車	其他
國府津	一里廿三丁	廿三錢	三等電車 十八錢
湯本	一里廿一丁	廿三錢	馬車 十六錢
關本	二里卅二丁	四拾五錢	電車 十八錢
道了	關本より十五丁		
小田原市内		十五錢	
久野村	一里	十五錢	
飯泉	三十町	十五錢	
栢山	二里	三十錢	
曾我村	二里	三十錢	
早川	半里	十五錢	
江ノ浦	二里半	四十錢	人車三等 廿五錢

吉濱村 四里十九町 七十錢 人車三等 四十錢
 湯ヶ原 五里十町 八十五錢 人車三等門川まで五十錢
 熱海 七里 一圓 人車三等 七十錢

人力車賃金は目下其筋にて改正中にして前掲は其の標準を推定して凡そ一里十五錢と定めたり

國府津小田原間渡船 十錢
 小田原熱海間 同 六十錢

解賃金
 國府津熱海は 三錢
 小田原は 五錢

箱根小田原地方遊覽の案

小田原と箱根

小田原と箱根

明治四十二年七月廿七日印刷
明治四十二年七月三十日發行

小田原と箱根
定價金五拾錢

編輯者兼
發行者

東京市小石川區原町十番地
日本歴史地理學會

代表者

岡部精一

東京市小石川區久堅町百八番地

藤原達三

東京市小石川區久堅町百八番地

精美堂

印刷所

印刷者

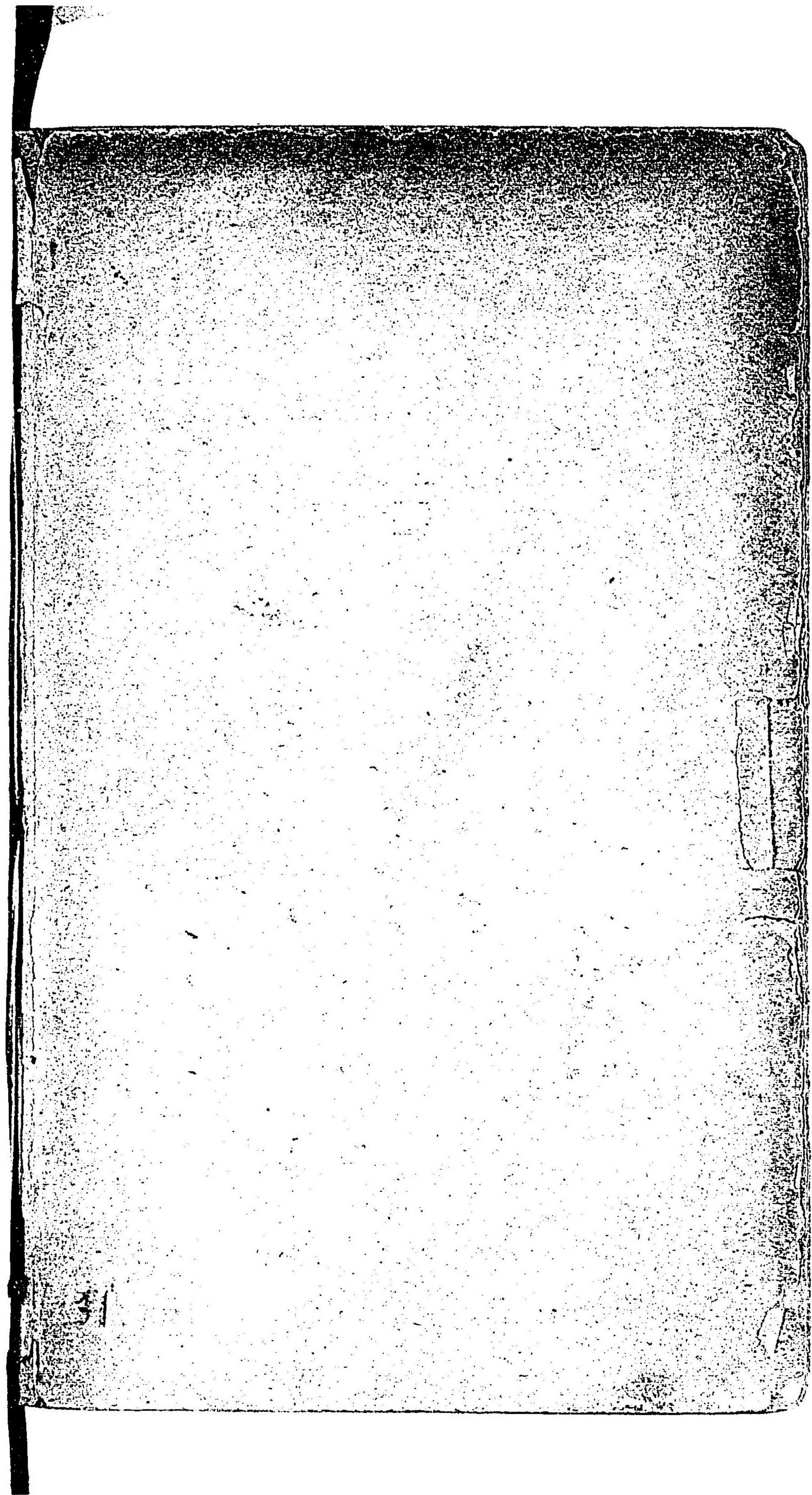


發行所
發賣所

東京堂、東海堂、北隆館、三省堂、求信堂、平井積善堂

平井積善堂

神奈川県小田原町幸一丁目



023742-000-5

特20-251

小田原と箱根

日本歴史地理学会/編

M42

ADC-0734



